

絶体絶命クロスアン
ジュ邪っ！

監督提督

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、危険と戦う一人の老人と

苛酷な運命に抗う、不屈の姫君の

二つの世界の命運をかけた、壮絶な戦いの物語である

(・ム・Ⅱ・ム・) ナ・ン・テ・ナ!

反省はするが後悔はしない(定型文)

クロスアンジュの無事完結と、何故かTokyo MX TVで始まったでんじーの再放送を受け、リビドーのままに始めた駄文でございませう。

原則として、黒館勢のキャラ崩壊は極力抑えていく方針ですが、時折じーさん達のパワーに引きずられておかしなことになることもままあるので、そんな時は生暖かい目で彼女達の身を案じてやってください。

残酷タグは念のためです。死亡者が沢山一名(誤字に非ず)出るのです。

なお、この小説でのじーさん達は、基本的には原作における大長編でのノリに近いものになります。

ですので、そこそこ戦闘力が高かったり、シリアスしたり、たまにいいこと言ったりします。もし違和感を覚える方がいましたら、「そういうこと」だと解釈していただけるとうれしいです。

小説の投稿は約二年半ぶりになりますので、至らない点が多々あるとは思いますが。

叱咤激励のほど、どうかよろしくおねがいます。

目次

神隠しじゃっ！	1
おいでませアルゼナルじゃっ！	22
友達になりたいんだ、じゃっ！	34
倒せドラゴンじゃっ！	50
プリンセスアイタタ、じゃっ！	76
はくじめましてはドクキドキくじゃっ！	97
マズいメシで戦ができるかーっツ！！	118
じゃっ！	

神隠しじやつ！

『…以上、現場からの中継でした。繰り返してお伝えします。本日は全国的に風が強く、各地で暴風波浪警報が発令されています。沿岸部にお住まいの方は高波に、また内陸部の方は竜巻などに十分ご注意ください』

それは風の強い、ある日曜日のも出来事であった。

「うへえ竜巻かあ。おつかねーな…」

強風でガタガタと窓が音をたてるリビングで、ニュース番組にしかめつ面を向ける少年。

ツンツン頭で白いジャケットを着込み、顔立ちはまだまだあどけない小学五年生。名を洋助という。

「このままでと、明日は学校休みかもなあ。とりあえず、今日みたいな日は外に出ないで大人しくしてるのが一番だよな！」

人は、台風や大雨大雪など、異常気象に見舞われた時、妙にテンションが上がるこ
とがある不謹慎な生き物である。

洋助少年もまた例外ではないのだが、

「さーてなにしておぼつかない♪ひとまずゲームでも…」

「オーイまごー!」

世の中には、例外を通り越した規格外キゴクが存在するのである。

ガラツ

「外に遊びにいこうぜえーっ!☆」

「言ってるそばからでたよ…」ズビーン

ここまでのログをいっそ清々しいほどに無視した発言と共に、襖を開け放ち現れたのは、1人の老人。

白いランニングシャツに茶色いハラマキといういかにもな出で立ち。手抜きなのかデیفオルメなのか知らないが、ともかくつるんとした両手足。

胴体よりも頭が大きいドラ○もん的なシルエツト。照明を反射する光沢にまたがるすだれ状の髪がちよつと切ない。

そして何より特徴的なのは、スイカ大の顔面で異様な存在感を放ちまくる、「ヒゲ」。

…そう、もうおわかりいただけただろう。

「ワシはでんぢやらすじーさん！世の中のあらゆる危険から安全に生き抜く方法を教えるプロじやーっ！」どどーん！

「（誰に向かって話してんだ…？）」

画面の向こう側と交流を果たすのは、まだまだ先のようにだ。

「っていかなに言っただよおじいちゃん！外は竜巻が起こるかもしれないって言われるぐらい風強いんだよ！」

「まごよ、昔から言うじやろう、子供は風の子だと」

「それがなんだよ」

話が見えない、と半眼を向けられるじーさんだが、意に介した様子もなくこう続けた。

「子供は風の子…つまり、風は全ての子供達の親！すなわち！

大風の吹きすさぶ今日というこの日こそ！思う存分風に飛び付いて甘えて遊んでもらうのじやーっ！！」どばーん！

「手荒く吹っ飛ばされるわーっ！！」

危険を避けるどころか、自らスキップ気分で G o t o h e l l するような所業である。

…ところで、どういうわけかこの少年、本名で呼ばれることがほとんどない。「まご」と呼ばれることがほとんど…むしろそうとしか呼ばれないのである。

だが当人はさして気にした様子もなく、諦めたのか慣れてしまったのか、その心中は不明である。

「というワケで今回は、風の強い日にお外で安全に遊ぶ方法を、ビビッと教えてやるぜーっ!」

「(まーた面倒なことに…)」

顔に暗い影を作るまごであったが、じーさんはこれまた気にした様子もなくによりよると小躍りしている。

「さて、とりあえず何をして遊ぶかじゃが、せっかくイイ風が吹いていることじゃし、それを生かしたイカした遊びをしなイカ?」

「(よくわかんねーけど最後のアブな…い!!)」イカむすーん

まあ原作では「少年ジャ○プ」の名前が出かかったことすらあるので、きつと大丈夫じゃなイカ?

「そこで、今日はこんなものを用意してみたんじゃ」

そう言ってじーさんは襖の陰に両手を突っ込み、大きな段ボール箱を取り出した。ドスン、と畳の上に茶色い紙製の箱が鎮座する。

「これって…」

箱の上には大きく「凧」と達筆な一文字。

「そのとーり…：凧揚げじゃーっ！」

「ムリに決まってるだろーっ!？」

得意気に告げるじーさんだったが、そんな馬鹿祖父にまごは速攻でNGを喰らわせる。

「こんな日に凧なんか飛ばしたって、竜巻に巻き込まれてバラバラのめちゃくちゃになるだけだよ!!」

「このバカチーン!!」バキッ

「ぬはーん!？」

まごは至極全うな意見を言っているだけなのだが、そんな理屈が通じるでんぢやらすじーさんではない。

唐突に頬へパンチを打ち込まれ、床に倒れ込んでしまう。理不尽極まりない。

「なんで殴られたんだオレは…」

「まごよ!家の中で大人しくしてれば竜巻を凌げると思ったら大間違いじゃ!」

竜巻を甘く見るなよ……。竜巻が起こると時空が裂けて神隠しにあうって、むかしともだちのとしひこくんが言ってた☆ミ」

「(としひこくんウソつきすぎーっ!!)」ドビーン

それが本当なら、ハリケーン大国であるアメリカは行方不明者続出で恐ろしいことになっているだろう。下手するとゴーストタウンだらけになるやも。

「安心しろ、ちよつとやそつとじゃ壊れない丈夫な凧を準備するからの」
「丈夫な凧って、いったいそんなの

しゅばっ

「どうや、って…」

言い切る前に、違和感を覚えたまごは自分の身体を見下ろす。

手足は開かれ、長方形の人間大はある木の枠のような物に紐でくくりつけられている。る。

枠の内側には細かい骨組みが張り巡らされ、全体に隙間なく貼り付けられているのは大きな紙。

それはまるで、漫画などで見る忍者が風を受けて空を飛ぶ時のようだ。

つまりは、

「嵐オレー……………ツツ?!?!」ガビビーン

「よしそれじゃいくぞー!」

「まてまてまてまてまてまて…ツツ!!」

戦慄するまごを尻目に、さっさと外へ出ようとするじーさんに、まごは必死で食らいつく。

このままうつかり実行されたが最後、自分の命は木っ端の如くF I y a w a y し
てしまうだろう。

「心配無用じゃ! これまたちよつとやそつとじゃ切れないよう荒縄だつて用意してある
! チクチクするぜ!」

「もはや嵐揚げじゃねーだろクソジジイ!!」
「なんじゃとーっ?!」

とうとうブチ切れたまごから暴言が飛び出し、じーさんと一緒になってヒートアップ
していく。

「うるせーバーカ!」 「カピバラと結婚しろオマエは!」などと低レベルな罵り合い

(?)に発展し、ついに手が出るかというところまで来て…
ソイツがやってきた。

ガシャーン!!

「わーーーーっ?!」

窓ガラスを突き破って。

「いったい何が…って」

窓からダイナミックに乱入してきたのは、2人にとつてよく見覚えのある人物。

ガラスの破片が突き刺さり流血する頭は鉛筆のようにとんがり、先がくるんと丸まった一本毛が生えている。

スーツ姿にネクタイを締め、両頬からも同じようにカールしたどじよう髭を生やす二頭身の男。

「校長!?!」

校長。まごの通う小学校の校長先生であり、自分が一番エラくないとすまない男であ

る。

「しつかりするんじや校長！何があつたんじや!」

「う……ここは……?じーさん……?」

衝撃で一瞬気を失つた校長だったが、じーさんの呼びかけでどうにか意識を取り戻した。

が、既に息は絶え絶えで死に体だ。

「どうして窓から……?」

「それは……コイツじやい……」

まごの問いかけに、手に持つそれをプルプル震えつつ掲げる校長。

「旗?」

人の顔ほどの大きさの旗であつた。

校長の顔（あきらかに盛って描かれたイケメンフェイス）がプリントされており、元はへし折れたのかささくれた断面を晒している。

「始まりは昨日のことじやい……。放課後、校長室の机にこのカッチョいいワガハイの旗が置いてあつたのじやい……」

「（自分で言うなよ……）」

「ワガハイはさつそく、学校の時計の上にこの旗を飾つたのじやい……。しかし今日に

なつて…」

———【回想ぎます】———

「ぐつ、マズイのじやい。このままでは、カッチョいいワガハイのちよーカッチョいいエラさを表したハイパーカッチョいい旗が風でカッチョ悪く吹き飛んでしまうんじゃない!」カチョーン

ゴオオオオオ

「すつ、凄まじい風じやい!早くしないと…」

ミシツ…ミシツ

「旗が!ぬおおおお!!」

…ボキッ!

「させるかあ——ツ!!」

パシツ

「いよつしやー!とつたのじやーい!!」

…フワツ

「…へ？」

ビュオオオオオオ!

「あ—————れ—————:……………」

—————

「とうわけなのじやい…ゴフツ」

「(バカ野郎だ—っ)」どがびくん

自己権力誇示のためならば、他の何もかも知ったこつちやないのがこの男である。

その情熱だけは、ある意味評価されるべきなのかもしれない。情熱だけは。

しかし、忘れないでほしい。

今現在、この家の外は警報が出るほどの強風が吹き荒れており、突然の突入者により窓は全壊して全開の状態なのだ。

そして、まごは未だ人間風の格好のまま…

「…うわっ!?!」

「ゴオオオオオオオオ!!」

「うわああああー!?!」

「まごー!?!」

吹き込んできた風にすくわれ、まごは窓の外へと飛び出していってしまふ。

「やらせんツ!」

「お、おじいちゃん!」

間一髪、じーさんはくくりつけられていた縄を掴むことに成功する。

しかし、まごの身体は暴風に煽られ宙を暴れ回り、いまにも飛んで行ってしまいそうだった。

「おじいちゃん助けてー!?!」

「安心しろまごよ!まごのこの命綱、絶対に離さん!ワシの命にかけても、まごは絶対に離さんツ!!」

「おじいちゃん……!」

「ぬっ、ぐう……っ!?!」

「え……」

力の限り踏ん張るじーさんだが、突如その目が驚愕を浮かべる。

反射的に背後を振り返ったまごの目に、風で破れた凧の穴ごしに写ったのは、

紫電を帯びた、灰色の巨大な渦であった。

「竜巻だー……っ!？」

「バカな!?日本であんな大きな竜巻が起こるワケがない!」

破天荒で知られるじーさんだが、一般常識ぐらい当然知っている。

平地の多い北米ならいざ知らず、起伏に富んだ地形の島国日本で、あんな「町を丸ごと飲み込むような竜巻」など、起こる筈がないのだ。

瞬間、

「しまっ…!」

一瞬の驚愕。そのスキを突かれ、ついにじーさんはまごと共に外へと引きずり出されてしまう。

「わあああ……っ!!」

「まご……っ!!」

宙でもみくちやにされつつ、竜巻へ一直線に吸い込まれて行く2人。

そしてじーさんの目に、更なる「異常」が飛び込んできた。

——ジジジジジジジジ……

「(なんじゃ!? 空間が歪んで……)」

ジジジジジジジジジジジジジジジ!!

「おじいちゃ——ん!!」

「ま——!!」

異常の渦に飲み込まれ、2人は意識を手放したのだった……。。

……いちゃん……じい……ん……

「う……？」

おじいちゃんっ！

「……はっ!？」

自分を呼ぶ声が聞こえ、じーさんは目を覚ます。

目の前には、心配げに自分を見下ろす可愛いまごの顔があった。

「まご……？」

「よかった、目が覚めたんだねおじいちゃん」

「ワシは、確か竜巻に？まれて……」

半身を起こし、自分が随分と寝心地の悪い、硬い所に寝かされているのにじーさんは気付く。

「(ハハ)は……？」

辺りを見回し、頭が覚醒していくにつれて、じーさんの中で違和感がどんどん膨

れ上がっていく。

全面灰色の、石造りで武骨な壁、床、天井。

自分が寝ていたのは、ベッドと言うにはあまりにおこがましい粗末な台。

そして最も目を引くのが、背後から僅かに光を取り入れる小さな穴と、正面に見える通路と自分たちを隔てるように嵌め込まれた鉄格子。

それはもう、みまごうことなき…

「牢屋?」

「そうなんだよ、オレもついさつき起きて、そしたらこんな牢屋の中にいて、もうなにがなんだか…」

「うーむ…」

わけがわからない、と首を振るまごの言葉を聞きながら、じーさんは考える。

自分たちは確かに自宅に、住み慣れた町にいた。

竜巻によって吹き飛ばされ、病院や路上、或いは山の中で倒れていることはあるにしても、牢屋にすることににはどうやっても繋がらない。

心当たりがあるとすれば、最後目にした、あの歪み。

「(アレが原因でワシらはこんなところに?それではまるで…)」

カツ、カツ、カツ……

その時だ。石の床を無機質に鳴らす、靴の音が聞こえてきた。

「お、おじいちゃん！誰か来るよ!？」

「シツ！まごよ、どんなヤツがくるかわからん。ひとまず落ち着くのじゃー！」

「う、うん！」

徐々に近付いてくる足音に耳を傾けていると、それが二重であることに気付く。どうやら、向かってきているのは二人らしかった。

そうして、音の主達が姿を表した。

「声がすると思えばやはり起きていたか。おはよう、お目覚めの気分はどうだ？」

「……………」

挑発的にも取れる物言いでまず口を開いたのは、黒い長髪を後ろで束ねた女性。切れ長の目に、赤い口紅で彩られ存在感を示す唇。

その口元は微笑を浮かべると共に、火のついた煙草を軽くくわえている。

白に黒を走らせたような服を身につけ、さらに内側の赤い白のロングコートを羽織っている。

一方、もう一人の女性は緑色という珍しい色合いの髪にちよこんと帽子をのせ、目元には細いフレームの眼鏡を装着している。

ただ、微笑を浮かべる黒髪の女性とはうってかわって、こちらの女性はじーさん達をまるで信じられない物を見るような、更にいえば未知の存在に向けるような目をしており、瞳には困惑の色がありありと見えた。

「…オマエ達は何者じゃ。ワシとワシの可愛いまごをこんなところに押し込んで、いったい何が目的なんじゃ」

「ほう。もしかしたら言葉すら通じないのではないかと心配してたんだがな、どうやら杞憂だったらしい。まあ、その方がこちらでも手間が省けて助かると言うものだ」

じーさんが問いかけるも女性は無視。くつくつと笑いながら、コートで隠れていた右手を、くわえている煙草へと伸ばす。

それを目にし、じーさんとまごは息を飲んだ。

「この女の人、右手が…!」

思わず呟くまごに意を介さず、女性は煙草を口から離し紫煙を吹き出す。

手慣れた手つきで煙草を持つその右手は、鋼鉄のソレへと化していた。

「質問に答えてやろう。私はジル、ここの司令を勤めている。隣は監察官のエマ・ブロンソン殿だ。」

対ドラゴン用前線軍事施設、アルゼナルへようこそ、イレギュラー 闖入者」

これは、世の中の危険と戦う一人の老人と

苛酷な運命に抗う、不屈の姫君の

二つの世界の命運をかけた、壮絶な戦いの物語である

〈絶体絶命でんぢやらすじーさん〉

〈クロスアンジュ 天使と竜の輪舞〉

〈でんぢやらすじーさん邪〉

《絶体絶命クロスアンジュ邪っ!》

いま、数奇な縁が物語を紡ぎ出す――

おいでませアルゼナルじゃっ!

「対ドラゴン軍事施設……」

「アルゼナル、じゃと?」

「そうだ。「人間」のための兵器として、「人間」の駒となり、「人間」のためにドラゴンを殺す……そのための前線基地。」

それを仕切っているのがこの私というワケだ」

そこまで言っつて、未だ呆けて固まったままのじーさんとまごを一瞥しつつ、黒髪の女性……ジルは再び右手の煙草へと口をつける。

スー………フー………

「質問は以上か?ならコチラの質問にも答えてもらおうか。貴様らには聞きたいことが山ほど……」

「(ヒソヒソ) まごよ、こいつイイ年してへんなカツコしてイタイこと言っつてドヤ顔してるぞ」

「(ヒソヒソ) ちよ、やめなよおじいちゃん! 聞こえちゃったらどうすんだよ」

「(ヒソヒソ) ああいうのを最近では厨二病と呼ぶのじゃ。よいかまご、間違ってもあんな大人になつてはイカンぞ? 当分結婚できなくなるから★」

「……聞こえているぞ電球頭」

「電球頭? あ、ナルホド確かにワシの頭まるくてツルツルのピカピカ……てコラー……!!」

「ノリツツコミ!?!」

面倒臭い。ジルは表情には出さず、内心で舌打ちをした。

数時間前、まだ日も上りきらない朝方に指令室へと舞い込んできた報告。

それは近日中に実戦配備が決まっている新人メイライダー二人からのもので、内容は「男の子らしきヒトと、人っぽい髭面のナニかが訓練場で倒れている」という非常に不可解なものだった。

ナニかに関しては何とまず置いておくとして、「男の子」というのは大問題である。ありえないのだ。女性にしか発生しない「ノーマ」達のみで運営されるアルゼナル

に、男子がいるということは。

一瞬、自分がよく知る茶髪の少年が脳裏に浮かび、肝を冷やしたジル。が、エマ監察官と共に現場へ赴くとそこには、件の少年よりも5つほど幼いであろう白いジャケツトの少年と、なるほど確かに、髭面の人間離れたシルエツトのナニかが倒れ伏していた。

相手が男、さらに言えば人間だと思ったからだろう。エマが率先して「とりあえず医務室に運びましょう」と、「マナの光」をもって少年の身体を持ち上げようとした。だが…

少年を包んだマナの光は、次の瞬間霧散霧消したのである。

「(世界初、ノーマの少年とナマモノ、か)」

その後、もう一方のナマモノもマナを打ち消すことがわかったため、気絶したままの二人を不穏分子と断定。そのまま反省房として使われている牢屋に投獄したのだ。た。

「(監察官殿は先ほどから随分と静かだが、いまだに半信半疑といった所なんだろう)」

普段の彼女であるならば「これだから野蛮で低俗なノーマは」ぐらいの嫌味を言う所だろうが、目の前の二人に向けられ続けているその視線には驚愕と恐れがない交ぜになっているように見える。

ノーマは女性にしか発生しない。それは、全世界で共通の常識であるからだ。

「(だが、そのほうがこちらにとってはやりやすい。私の好きなように話を進められるからな。…しかし)」

「誰が電球頭じゃえーコラー！そんなメタリックな腕でカツコつけおって！ライダー○ン気取りかテメー!!」

「おじいちゃん！コロコロのマンガ以外のキャラの話はやめて！」

出鼻を挫かれるとはこのことか、とジルは内心ため息を漏らす。

こちらのペースでさっさと情報を聞き出すはずが、もう既にグダグダである。

「生憎と、この右手は真正正銘の義手だ。そこまで疑わしいのなら、身を持って体感させてやっても私は一向に構わんが？」

「わーっ！すみませんすみません！ホラおじいちゃんも謝って！」

「わり」プゝ

「真面目にやれやジジイ!!」

もうさっさと指令室に戻ってしまおうか…と、なんだかどうでも良くなってきたしまったジルなのであった。

「…ワシらに聞きたいこと、か。いいじゃろう、じゃがその前にもうひとつ聞きたいことがある」

「…なんだ、言ってみろ」

漸く話が前進し、ちよつとホツとしたジルだったりする。

「ワシらの他に、とんがり頭のどじょうヒゲがいた筈なんじゃ。そんなヤツに覚えはないか?」

「あつ、そうだった校長!」

竜巻に吞まれる直前、風に飛ばされ家に突っ込んできた校長。じーさんとまごがこうしてココにいる以上、校長もまた同じように巻き込まれている可能性が高い。

「ふん。やはり、アレも貴様らの仲間だったか」

「えっ? 知ってるんですか!?!」

「ああ知っているとも。ソイツの所在がそんなに気になるか?」

「は、はい!」

余裕を少し取り戻してきたジルに対して、まごは焦りを隠せずにいる。

「その人はオレの学校の校長先生なんですけど、自分が一番エラくないと気がすまない

人で、そのためなら手段を選ばないというか何でもその割りになんかんや弱くて……」

「……話を聞く限り、ただの小悪党か何かのように聞こえるが？」

「それは……まあ……」

事実、まご自身の校長のおかげで痛い目にあつたことが何度もある。イイヤツかなヤツかと聞かれれば、ヤなヤツであることは違いない。

「まあ校長のハナクソつぷりは今どうでもいいんじゃない。が、あんなヤツでもほつとくわけにはいかん。居場所を知ってるなら会わせてくれ、話はそれからじゃ」

少なくとも、いきなりヒトを牢屋に放り込むような連中が、自分たちに友好的であるとは思えない。だからこそ味方は少しでも多いほうがいいだろう……じーさんはそう考えたのだ。

もつとも、これぐらいのことは相手に読まれていることだろうとは思うので、まともにとりあつてもらえるかは怪しいところである。

しかし、

「いいだろう」

要求は、拍子抜けなほどすんなり通つた。

「なぬ？」

「いい、いいんですか?」

「いいも何も、仲間に会いたいんだらう?別に、私にそれを止める理由はないさ」

そう言つてジルは懐に手をやり、チャラツという金属が軽くぶつかり合う音と共に鍵を取り出す。

そしてそのまま、躊躇なく牢の鍵穴に差し込み解錠。内と外を冷たく区切る鉄格子の扉は、いともたやすく開かれた。

「おつ?なんじゃ、オマエ案外素直なヤツじゃのー。ただの厨二病じゃなかつたんじゃなー♪」

「まだ言うか…」

呆れるまごに構わず、上機嫌でさっさと牢から出てくるじーさん。

「じゃあ早速校長のところへ——」

チャカッ

その眉間に、僅かな光源で鈍く黒光りする銃口が突きつけられた。

「……」

「おじいちゃんっ!?!」

「仲間には会わせてやろう。だが、少しでもおかしな動きが見えれば、その時には綺麗な風穴が1つ開くことになる。それが嫌なら、大人しくしておくことだ」

不適に口元を歪めつつ、くわえていた煙草を左手で放り、踏み消す。

「言っておくが、これは忠告でもなければ警告でもない。命令だ。どんな事情があろうと、アルゼナルに「ノーマ」としている以上は私に従ってもらう、一切の異論は認めん」
数秒の静寂。自身に凶器を向ける女性を、ジーさんは睨むわけでもなくただ黙って見つめ返し、やがてゆっくりと首を縦に降った。

「…わかった、オマエの指示に従おう。じゃが、どうかまごには手を出さないと約束して欲しい、やるならばワシだけにするんじや」

「おじいちゃん……」

「さて、な。それは貴様ら次第だ。…監察官殿」

「…え？あつ。な、何です司令」

呼び掛けられ、ここでようやく口を開いたエマを横目に、ジーさんは考える。

「ドラゴン」 「アルゼナル」 「人間のための兵器^脚」

そして、「ノーマ」

「話はお聞きだったと思うが、こいつらを例の場所に連れて行きます。よろしいですか
な」

「…構いません。ですが、くれぐれも目を離さぬように。運営に支障をきたすわけにはいきませんからね」

「ええ、心得ておりますとも」

「(ワシらは、ワシの考えている以上の厄介事に巻き込まれてしまったのかもしれないな……)」

「では、感動の再会といこう。お仲間は今ごろ、貴様らを見つけた二人が手厚く相手してやっているはずだ。ついてこい」

促されるまま、ジルとエマに前後を挟まれ歩き出すじーさんとまごであった。

……………。

「(ハハ)だ」

じーさん達が案内されたのは、ひやりとする牢屋とはうってかわって、ポカポカ陽

気が心地いい晴天の下。つまりは屋外であった。

「ジャスミン、作業はどうだ？」

「ん？ああジルか。ちょうど今しがた終わったトコだよ」

「そうか、ちょうどいいタイミングだったな。ご苦労だった、ココ、ミランダ。楽しんでいいぞ」

「い、イエスマム！」

一行を出迎えたのは、初老の女性と二人の少女。

初老の女性には頭にバンダナを巻き、淡い紫を基調とした服装で、ジルに対し応じる物腰も含め、全体的に落ち着いた雰囲気醸し出していた。

また、側には頭にゴーグルを着けたゴールデンレトリバーらしき犬が控えている。

それに対し少女二人は、背丈からしてまごと同い年か少し上で、ジルと同じような依託の服装で何故かヘソ出し。おまけに敬礼姿はどこかぎこちない様子で、見るからにソワソワしている。

藍色の髪をお下げにした少女がココ、モスグリーンのショートヘアがミランダであり、その視線はチラチラとジルの背後に向いている。

「で、後ろのが例の連中かい？なるほど、確かに男だねエ」

「そうだ。すまんがそこを退いてくれるか、会わせてやると言ってしまったのでな」
「あいよ」

ここで、ジーさん達は辺りを見回す。

目に写るのは規則正しくズラリと並んだ、綺麗に四角く加工された石の数々。

それらには皆一様にアルファベットで文字が掘り込まれており、英語のわからない二人にもこれらが何なのかハッキリとわかった。

「待たせたな、貴様らの仲間ならここにいる」

「……………」

そう言うジルが手を置くのは、周りの物と同じような形をした石…墓石。

それには、同じようにアルファベットでこう彫られている。

『Pencil head』

……………。

「校長すでに死んだるがなーーーーっっ!!!」ガビーンズビーンドビーン

ありがとう校長。さらば校長。君は、僕たちの心の中できつと生き続けることだろ
う（二時間くらい）

友達になりたいんだ、じゃっ!

「残念だが、そいつは見つかつた時にはもう手遅れだったよ。ま、素性が知れないとは言え死体をそのまま放つておくのも後味が悪いからね、急ごしらえだが墓をたてて供養してやったのさ。」

粗末なもんだが、男性ノーマのサンプル……とか言つて研究材料にされるよりは幾分マシだろうさ」

「それで、墓穴を掘つたのがこの二人だ。見つけたのは自分たちだからと、自ら進み出たな」

そう告げるジャスミンとジルの声が聞こえているのかいないのか、じーさんは驚愕の表情でよろよろと墓石に歩み寄っていく。

「そんな……校長が……」

ワナワナとうち震えるじーさんを、ココとミランダもまた悲痛な面持ちで見ている。

ドラゴンとの戦いを余儀なくされるノーマ達は、常に死と隣り合わせ。つい先日までライダー候補生だった彼女達もまた、知人や先輩であるライダー達の戦死を目にしていたのだ。

「校長……校長……！」

目の前で咽び泣く老人の気持ちは、幼い少女達にも痛いほどよく分かるものであった。

「校長……つつ!!」

多くの少女、女性の墓に囲まれる中、じーさんの慟哭が響き渡る。

「校長っ！何故死んだ！何故死んでしまったんじゃあ………つつ!!」

「………ちよ………ツツ!!!」

まあよくあるコトか……」ホジホジ

………。

「「え………!?」ずびーん

……ボゴオツ!!

「よくね………のじゃ………いい!!!」

「おち、落ち着いてココッ、こっコッ、ココッコー！」

「…ふうっ」

「うおっ」と

「(まあそーなるわな…)」

ココとミランダは身を寄せ合い、壊れたレディオとアホウの鶏と化しており、猛烈なめまいを起こして倒れかけたエマは傍らにいたジャスミンが咄嗟に支えたおかげで事なきを得た。

一方まごとしては、この手の不条理ネタは日常茶飯事であるからして、慣れっこである。故に、動揺する女性達を同情混じりの半笑いでただ眺めるのだった。

「…スーーーーー、フーーーーー、フーーーーッ……」

ジルはと言えば、素知らぬ顔で煙草を口につけ普段よりずっと深く吸っているのだが、悲しいかな火が点いていないのに一切気付いていない。

「…一体どういうことだ、ジャスミン」

「どうもこうも、こつちが聞きたいくらいだよ。一応マギーにも見せだし、私だつて埋める前に確認した。ついさつきまで、間違はなく死体だったはずだよ」

「じゃあ目の前でピンピンしているナマモノは一体全体なんだ…!?!」

「(スイマセン、こーゆるマンガなんです…)」ちくん

当惑の極みに入りつつあるジルに対して、とりあえず内心でこっそり謝罪しておくことにするまごなのであった。

「チツ、まあいいのじゃい。今はそんなことより…オイ! そのクソガキども!」ズビシツ

「ヒイツ!?!」

自分たちを思い切り指差してくる校長ソツビに、少女二人はビクツと体を震わせ顔を青くする。

「キサマら、小娘の分際でよくもこのワガハイを地面の下なんぞに押し込んでくれたな…。万死に値するのじゃい…!」

「ふええ…」

「…なっ、なによ! 死んでたんだからちゃんと埋葬してあげたんじゃないのよ! 来ないでこのえんぴつゾンビっ!」

「み、ミランダちゃん!」

「えんぴつゾンビいい〜?」

自分がココを守らないと、とミランダは果敢に声を上げる。が、指を鳴らしせまる校長は不気味に笑みを深めるのみである。

「ぐふふ…。口答えとはますます生意気なガキんちよなのじゃい。ならばお望みどーり

！キサマらはワガハイの手で直々に…」

校長が両手を掲げて自身の身長は何倍もの高さで跳躍、

「ぶちコロしちやりゆりよれー！ー！ー！！」

血走った目を光らせ、二人の頭上へと飛びかかった。

二人が思わず目を瞑り、そして……

「えーい☆」

「こしやつ

「ほぎよ〜〜〜つ?!」

じーさんが手にした校長の墓石が降り下ろされ、校長は叩き落とされるばかりかそのまま地面と鈍器に顔面がサンドイッチされることとなった。

校長の自業自得であるが、その際にじーさんの腕がによーんと伸びていたので、目撃してしまったジルが眉間を揉みほぐしていた。

「ジジイキサマーツ!!邪魔すんじゃねーのじゃい!」

「うるせーバーカ!オマエごときが美少女アニメのキャラにおさわりなんて一億万年早

いわーっ!!」

「(数字が幼稚園児だーっ) みそくん

「…ええいうるさい!もうこの際そのえんぴつ頭の生死はどうでもいい!」

アルゼナルの面々からすればいつになく荒れた様子で、ジルは二人のヒゲを黙らせるよう声を張り上げた。

このままでは状況が一向に進まないばかりか、自分の頭までおかしくなってしまうそうだったからだ。脳みそまで機械仕掛けにはなりたくない。

「とにかく!約束は果たした以上、貴様らの知りうることを洗いざらい吐いてもらうわかってるな!」

「なんじやいキサマ!このワガハイに命令する気かーっ!?!」

「校長先生は黙っててください!話進まねーから!」

「で、では尋問室へ…」

知恵熱気味なのか、頭を押さえつつエマが一步踏み出した。

その瞬間、耳障りなけたたましい音が辺りに鳴り響く。

じーさん達からしても明らかな、警報だ。

「!!」

「な、何!? 何の音!」

「ちい、面倒な時に…。監察官、司令室へ」

「はい。ですが…」

「オイ! 何が起こってるんじや!」

「フン、決まっている。敵襲だ」

敵性体襲来。その一言に、三人は息を呑んだ。

「敵じやと!? まさか、さっき言ってたドラゴンかつ!」

「他になにがある。言った筈だ、ここはドラゴンと戦う最前線だと」

「いや、ワシはてつきりオマエさんの脳内設定だとばかり…」

「黙れ、声帯を引っこ抜くぞクソジジイ」

「こえーよ!?! 力ワザにも程があるじやろ!!」

「やってる場合ですか司令!!」

エマが痛む頭にもち打ち割って入る。

今もなお警報はなり続けており、基地内のノーマ達は戦闘準備に走り出しているのだ。司令官がいつまでも油を売ってていい筈はない。

「わかっている! ジャスミン、悪いがこの三人を尋問室へ適当に放り込んでおいてくれ。

必要なら複数人監視に付けても構わん」

「やれやれ荷が重いねえ。わかっただよ、わかっただよからさっさと行つてきな」

「頼む。その馬鹿共!くれぐれも、妙な気を起こすんじゃないぞ」

ギロリ、とじーさん達を一瞥してから、ジルはツカツカと足早に去つていき、エマもそれに追随していったのだった。

「行つちやつたね…」

「ウム…」

「おのれあの女々々。世界一エライワガハイに向かつて好き放題言いおつてエ〜!ヤツの今晚の味噌汁に白髪染めをたっぷり混ぜてやるのじゃい〜!」

「くだらねーコトすんなっ!」

「やれやれ、とんでもない連中が迷い混んできたみたいだねえ」

そう一人ごちてから、さてと、とジャスミンは三人に向き直つた。

「自己紹介がまだだったね。私はジャスミン、ここアルゼナルでジャスミン・モールつて市場を切り盛りしてる。おそらく今後、なにかとよく顔を合わすことになるだろうからね、よろしく頼むよ」

「あ、ハイ。よろしくお願いします」

「いい返事だ。そしてこつちが…ん?」

ふと、少女二人がいないことに気づく。

辺りを見回してみれば、随分と離れた位置から遠巻きにこちらを窺っていた。

「なにしてんだか二人揃って。ココ！ミランダ！こっちきな！」

「は、ハイっ！」

小走りで寄ってくる二人。

自己紹介をジャスミンに促され、藍色の髪の少女ココは、まごを前にして目を白黒させだした。

「え、えつと、その……………うう」

「？……………あの一、」

「はっ、ハイ!!」

「うおっ？」

小首をかしげるまごが恐る恐る声をかけてみると、ココは跳び上がるカエルかなにかのようにピシャンツ、と背筋を正した。

「はじめまして、ココでしゅっ！」

……………。

「…嘸んだあ」

「ええー…」

ココ、大事なところで運悪くカミカミ。自滅した挙げ句しやがみこみ、真つ赤になり沈没してしまった。

「あはは…。えつと…あ、あたしはミランダっていうんだ。その…：そっちの名前も、聞かせてもらつていいかな?」

「あ、うん。オレは洋助、よろしく」

「こつちこそ、その…：よろしくねっ」

ミランダもまた、嘸みこそしないが視線があつちこつちにふよふよ舞っている。

あからさまな緊張の様子に、まごも戸惑いを覚えてきていた。もつとも、女の子とはいえ同年代の相手なので、内心ちよつとほつとしていたりもするのだが。

気付けば、警報はひとまず鳴りやんだようだった。

「あの…：さ、二人とも固いつていうか、ちよつと緊張し過ぎなんじゃ?」

「まあ無理もないさ。この島にいる大多数は、男を生で見たことなんざ一度たりともないだろうからね」

「え?」

「なんだ、聞いてないのかい? ノーマは女しか生まれなない。だから、風紀上の観点からア

ルゼナルには女しくないない。あんた達は異質も異質なのさ」

「…ええええ!!」

「変な声出すんじゃないよ。つたく、別に驚くことでもないだろうに、本当にどつから来たんだろうねえあんた達は」

と、呆れたと言うようなジャスマミンに、まごはそもそもの疑問と謎を思い出す。

じーさんや校長が空気を盛大にブレイクしていたせいで頭の片隅に追いやられていたが、自分たちの身に降りかかった事態に関して、未だ何ひとつわからないでいるのだ。ここはどこなのか、そもそも日本なのか。何故、どうやって自分たちはこんな所にいるのか。

アルゼナルやドラゴンはともかく、「ノーマ」。女性達が一般常識のように発するこの単語の意味がさっぱりわからない。

「あ、あの…ヨウスケ、くん?」

「…へっ?」

頭を抱えそうになった時、どうやら復帰したらしいココがおっかなびつくり自分の名前を呼んでいる。

…ふと気づく。

「(そーいえば名前で誰かに呼ばれたのって……16年ぶりじゃね!)」なすーん

でんぢやらすじーさんの前身である読み切り、「ぼくのおじいちゃん」(2000年発表)まで遡っていた。

名前を呼ばれてちょっと感動してしまった自分がいたたまれなくなってしまうまごである。

「わ、私ね、男の人って本や映像でしか見たことなくって、絶対に会うことなんてないだろうって思ってた…。だから、初めて男の人に会えたのが、しかも同じ年ぐらいだってというのがなんだか嬉しくって……えと、つまり何が言いたいかと言うと…」

顔を仄かに赤らめ指先をちょんちょんつついていたココだったが、やがて意を決したように視線を上げて、ハッキリと告げた。

「私たちと、お友だちになつてくれませんか?!」

眉を逆ハの字にしてまっすぐ見つめてくるココに、まごは何やらヘンな顔になってしまいそうになるが何とかこらえつつ、

「い、い、いよっ…」

短くOKを伝えると、ココの表情が一気に輝く。そんなストレートな反応を目の当たりにしたまごの頬もまた、慣れない展開で赤くなっていた。

「あ、ありがとう!よろしくねっ」

「ココだったら、ちゃっっかり私まで巻き込んでちゃっつて」

「えっ？ミランダちゃん、嫌だった？」

「まさか、そんなわけないでしょ。ってことで、私のこともよろしくね、ヨウスケ」
「う、うん。こっちこそ」

女の子に名前を呼ばれるくすぐったさを感じつつも、牢で目覚めてから初めて純粹な笑顔を浮かべることができたまごだった。

「…あー、ゴホン」

と、少年少女を見守っていたジャスマミンが、遠慮がちに口を開く。

「邪魔するようで悪いけど、坊や…ヨウスケって言ったね」

「はい、そうですけど」

「お前さんちのじいさん、いつの間にやら姿が見えなくなっちゃってるんだが…」

「……え”っ!?あ、あれっ!?”」

バツ悪そうに頭をかくジャスマミンにそう言われ、慌てて周囲を見回す。

右を見る。

左を見る。

後ろを見る。

念のため地面と空も見る。

「おじいちゃんっ!? 校長先生!」

「まいったねこりや…。ジルになんて説明したもんか」

はあ、とジャスマミンが嘆息したその時、どこからかジェット噴射のような音が耳につく。

まご以外はすぐに合点がいったようで、島から離れていく複数の機影を視線ですぐに捉えていた。

「出ていったようだね。今日の当直は、第一中隊だったかね」

「だ、第一中隊…!」

「私たち、もうすぐあの部隊に…」

「ああ、そういやあんた達はあそこに配属だったね。なら、隊長ゾーラには気を付けなよ、あいつは本当に見境つてモンがないからねえまったく。なにかあれば、遠慮なく副隊長サリアにでも言いつけてやんな。そんなの気にするヤツじゃあないが、まあ泣き寝入りするよりはマシさ」

「…イエス・マム」

「……………」

三人の会話を聞き流しながら、まごは小さくなっていく機影群をじつと見つめていた。

「? どうかしたの?」

「ヨウスケくん?」

まごは、直感的にこう思った。

すごく、イヤな予感がする。

倒せドラゴンじゃっ!

『第一中隊、まもなく視認可能域に入ります』

対ドラゴン用機動兵器、パラメール。

ノーマの棺桶とも称されるソレは今、眼下に海面を見下ろす中で7機で編隊を組み、空を駆けていた。

しかし、中隊と言う割にカラーリングはバラバラで統一性がなく、それも赤、青、黄、緑、桃、そして橙に紫と、見ようによっては戦隊ヒーロー物をリスペクトしているようにも見てとれた。

「数と識別は？」

『確認できるだけで、スクーター級が10、ガレオン級が1です』

「ふうん……。デカブツが厄介だが、大した数じゃないね」

ウエーブがかった見事なブロンドの長髪を風になびかせ、紫色にペイントされた指揮官機アーキバースに騎乗する隊長のゾーラは、オペレーターとの通信ののち、直ぐ様周囲の部下達へと通達する。

「全員聞こえたな！ 相手は少数だ、小物を速やかに各個撃破しつつ、大物を包囲。集中放

火でとつとカタをつけるよ！」

「イエス・ママ！」

淀みない斉唱は軍隊教育の賜物か。

が、メイルライダーと呼ばれる彼女らのその表情はバラバラで、内2名は不満げな様子
子を隠そうともしていなかった。

「つたく、これじゃあ今回も大した稼ぎにならないじゃねえか、張り合いでねーつつの」
「出撃コストばかりかかる……実入りが益々減る……ハア……」

ぼやくのは、オレンジでハネた髪が特徴のロザリーと、淡いアクアブルーの髪で片目
を隠し、後ろを赤い髪止めで三つ編み一本にまとめたクリス。

機体は連装砲を背負った中距離装備の黄色い量産機グレイブと、キャノン砲を標準装備した黄
緑の砲戦仕様機ハザード。

ロザリーは単純に報酬が少なくなることが不満だけなのだが、クリスに至っては持
ち前のネガティブ思考も相まって既に陰鬱としている。

「なに？二人揃って戦意喪失？なら、アンタ達の取り分もアタシがもらってやるよ」

「ばっ!?勝手なコト言ってるじゃねーよヒルダ！」

「いつも私たちよりずつと稼いでるクセに……」

不適な笑みで不穏な事をさらりと口にしたのは、ゾーラと同じくウェーブがかった、

こちらは鮮やかな赤い髪をツインテールにした、ヒルダ。

乗機はロザリーと同じグレイブであるが、こちらは出力と装甲に強化を施した高機動型であり、実力者向けの調整が為されている。

「はいはい、敵さんはもうすぐなんだから、三人とも喧嘩しないの。サリアちゃんに怒られちゃうよ?」

「そーそー。それに、もしうつかりエルシヤまで怒らせちゃつたらそりやあもう大変なことにな〜」

「…それは私が一人で怒っても大したことないと言いたいのか? ヴィヴィアン」

「うわっ、ヤブヘビ?」

「一言多いのよ、ヴィヴィちゃん?」

そして、橙、桃、青…水色の機体に跨がるのが、エルシヤ、ヴィヴィアン、サリアの三人。

ピンク色の長髪で背中を隠したエルシヤの機体はハウザー。長距離ライフルを携行した、高火力支援機となっている。ピンクハイインターナショナルデモナイデス

サリアは紺の髪をヒルダと同じくツインテールにしている、がこちらはストレート。機体はアーキバスで、出力並びに通信・索敵能力が強化されたゾーラ機と異なり、ライダーの適性に合わせ長距離狙撃用へ特化した調整が施されている。

サーモンピンクのショートカットにピヨンと立ったアホ毛が可愛らしい。そんな中隊最年少ヴィヴィアンの機体は他のどの隊員とも共通しない、高機動試作機^{ザイ}。

この機体は機動力を高めるため装甲が限界まで削られており、結果出力バランスが崩れ、非常に扱いの難しいピーキーな仕様となってしまった物である。

事実、実戦でこの機体を使用しているのは、現在ヴィヴィアンのみである。

「無駄話はそこまでだ、奴さんのお出まじだよー!」

と、ついに敵の姿が見えた。悠然と空を進む大型ドラゴン^{ガレオン級}一頭に小型ドラゴン^{スクリーナー級}が複数侍るようにして飛行していた。

「数はほぼ想定通り…。お前達、手はず通りだ。ぬかるんじゃないよー!」

「イエス・ママ!!」

ゾーラの声に続けて再びの斉唱。ライダー達の目に戦いの灯が点る。

「…おろ?」

…が、しかしここで、約一名が気付いた。気付いてしまった。

「…うーん、ちよーつとここでクイズだあ!」

「はあ?」

「何よヴィヴィアン。そんなの後でいくらでも聞くから今は集中しなさい!」

「サリアとヒルダのー、うしろの正面は誰でしょうかつ！」

「…後ろの正面？」

「つたく、こんなタイミングで一体なんだってん…」

ズゴゴゴゴゴゴゴゴ……

「
」

二人は言葉を失った。何故なら、

それぞれの真後ろに、8頭身でブルーメランパンツ一丁のゴリマッチョなヒゲが鎮座し

ていたからである。

しかも、なんかジツトリムワツとしてる。

「んな~~~~~~~~ツツ?!?!」ズガビーン

「フツフツフツ、ついにワシらの出番が来たようじゃな校長」

「ぐっふっふっふっ、ドラゴンと言えど所詮はトカゲ。ワガハイのパワーで指全部つき指させてやるのじゃい…」

「ならばワシは、奴らのヒジというヒジのイヤな所をぶん殴って腕をビリビリさせてやるぜ…」

「ヌツフツフツフツフツフツフツ☆☆」

「(むさいのがなんか地味なこと言ってる!?)」ずも〜ん

何故か8頭身で、何故かマツチョで、しかし首から上だけいつも通りの、じーさんと校長の姿がうら若き乙女の背後にあった。

突如として身に降りかかったシニールさと汗臭さに、ヒルダとサリアの思考は停止せざるを得なかった。

「……………」

「すっげー!ムキムキだムキムキ!」

ゾーラ以下他の隊員も同様で、目の前の怪奇現象にただただ呆然としている。約一名、無邪気にはしゃいでいる者もいるが。

「…誰!」

「つてゆーかナニ!」

絞り出されるようにこぼれたクリスとロザリーの一声に、ヒルダとサリアは我に返った。

「な、何なんだお前!!いつからそこにいた!」

「まーまー落ち着け。あんまカリカリすつと、ハゲるぞ?」

「テメーに言われたかねえよっ!!」

「騎乗した時には間違いないなかつた筈なのに、一体いつの間に…つていうか何で誰も気付かないのよ!それに…」

「オイキサマ!ブツブツ言つてないでさっさとワガハイを奴らの前へ連れていくのじゃい!!尾てい骨コナゴナにするぞ!!」

「初めて出会った男の人が、コレだなんて……」

激昂するヒルダと、ささやかな憧れが穢されうちひしがれるサリア。

謎のナマモノ出現により、「戦いの灯」なんてものは誕生日ケーキの蝋燭かの如く儂く霧散。

もはや空気は放送事故気分である。

シヤアアアアッ!!

そんな隙が見逃されるほど、彼女らの戦場そらは甘くはなかった。

「全機散開!!」

「っ!!」

スクーター級が数体迫りくるのに対し、ゾーラの指示が飛ぶ。

隊員達は反射的に機体を翻し、全機どうにか事なきを得た。弾の一発も入れぬうちに落とされるなど洒落にもならない。

「のわーーーーっ!」

「ぐわーーーーっ!!」

しかし急な機動である。対照的に、じーさんと校長は慣れない慣性とGに悲鳴を上げ

る。

その拍子(?)に、二人はいつもの2頭身に戻ってしまっていた。

「キサマーツ!なんじやい今のは!もつと丁寧に操縦しねーかコラ!!」

「ああもううるさい!!…つてなんか縮んでる!」

「危うくゲロ吐くところだったじゃねーか!いいのか!?!オマエの背中にぶちまけていいのか!?!」

「こつちもかよ!?!つてか本当にやったら殺す!!」

そうこうしている間にも、戦場は動いていく。

第一中隊の前方からは大型を含む後続のドラゴン達が迫りつつあった。

「ちっ、先手を取られるなんざ面白くない!全機、駆逐形態!体勢を立て直せ!!」

「イエス・マム!!」

ゾーラのを筆頭に、それぞれの機体が姿を変える。

跨がる少女を抱きしめるように覆い隠すと、それを基点に各部がスライド。

両足、両腕、頭、そして翼。

何もかもが完璧と言われるこの世界で、唯一悪意と理不尽を背負わされる彼女達ノ

マ。

それらをその身に宿し、共に果てる天使箱桶こそが、パラメイルである。

…なのだが、

「おおっ！戦闘機がロボットにトランスフォームしたのじゃい！…ん？何でワガハイの乗ってるコイツはこのまんまんじやい？」

「したくてもできないのよっ！」

「どゆこと？」

「後ろ見なさい！！」

「へ？」

シギヤアアアツ！！

「のおく〜ツツ?!」

あろうことか、初撃を空振ったドラゴン達の全てが真っ先に並んで飛ぶサリア機とヒルダ機に狙いを定めて来たのである。

背後から喰らいつかんと牙を剥き出しにし、追跡してくるその数、5匹。

「ったく！なんでよりによってこっちにはつか群がつてくるんだよ!？」

「ヤツらめ、さてはワシがカツチヨイイからひがんじよるな」

「うるっさい!!いちいちウザいんだよハゲ!!」

実際は、他と違う臭い加齢臭がドラゴン達にとってウザかったからだったりする。

ともかく、ここまま変形などすれば隙を突かれてあつという間に四人は食い殺されてしまおうだろう。

「おのれ小癩な〜〜!ならば、ワガハイの必殺技で目にも見せてやるのじゃい!!」

「ちよつと!お願いだから余計なことしないで!」

「はああ〜〜〜…!!」

「聞けえーっ!!」

サリアの叫びも空しく、校長は何やら額に青筋を立てて体に力を込め始める。

すると、

「…!?なんだ、急に雲が!」

ゾーラが発砲しつつ辺りを見回せば、ついさつきまで雲ひとつない青空だったはずが、どこからともなく真つ黒い雲々が湧いて出て、上空を覆い隠そうとしていた。

「喰らうがいい!これぞワガハイの必殺…」

ゴロゴロゴロ…

黒雲の中で稲光がほとばしった、次の瞬間。

「校長サンダー………ツツ!!」

黒雲、雷雲から電が降り注ぎ、敵の体を貫いた。

ギャアアツ!?

予期せぬ一撃を喰らい、ドラゴン達が空中で悶える。

「っ、今だクリス!!」

「う、うん!」

何が何だかわからないが好機。ロザリー機とクリス機がすかさず、ちょうど前方にいた2匹へそれぞれアサルトライフルの引き金を引く。

なすすべなく直撃を受けたスクーナー級2匹は、血しぶきを上げながら落ちていった。

「つしやいだきイ!」

「でも、今の何…?」

それは、サリアが一番言いたいことだった。

「がーっはっはっはっ!! やってやったのじゃーい!!」

「あ、あなた一体…!?!」

「よーし、このまま畳み掛けてくれるわーっ!! どうっ!!」

「あ、ちよつと待ちなさい!?!」

サリアの制止も聞かず、校長はアーキバスから跳躍。近くにいたドラゴン一体へと躍りかかった。

「必殺! 校長スーパーハイパーミラクルマーベラステクニックウンバボーメキシカンス
ピードワンダフルカメハメマンチカンポチョムキンバーニングアイアンザブングルラ
イトニングスターフォークセクシユアルワイルドボンバーダイナミックシルバニア
うっふんあっはんでユエリストドラグリーンホワイトミラバケツソえくくくくくくく
と」

カ
プ
♪

「ぎゃああゝゝゝ……」

ガブガブムシャムシャパリパリマグマグ

哀れ、校長はスクーター級にあっさりいただかれてしまったのであった。(あんまり

おいしくなかった)

ツドーン!!

ギヤアツ!?

「…えーと、ついうっかり撃っちゃったんだけど、良かったのかしら?」

「本当に、一体なんだったの…?」

「な~~~~む~~~~」

ついでに、校長を補食したドラゴンもまた、エルシャ機の砲撃で落とされてしまったのだった。

ありがとう校長! さようなら校長! キミの勇姿はきつと語り継がれることだろう。

(チャーハン作ってる間くらい)

「なんじゃ、アイツもう死んだのか」

「はっ、お仲間が死んだのに随分薄情なもんだね!」

「イヤだって、今日でもう2回目じゃし」

「は?」

「っ、ヒルダ前!」

サリアの声に視線を戻せば、ヒルダ機の行く手を遮るように、ガレオン級のその巨体が迫っていた。

「ちイ!?次から次へと面倒くさい!!」

「おっしやー!今度はワシの番じゃあーっ!」

「ほんとメンドクせえ…」

言うが早い、じーさんはグレイブの上で器用に片足で立ち、両手を頭上横に掲げてみせる。いわゆる、荒ぶる鷹のポーズだ。

「ドラゴンよ!ワシの必殺、失恋大爆笑パンチを受けるがいい!」

「どんな技だよ!」

「いくぞおおおっ!!」

じーさんもまた跳躍。ガレオン級の眼前へ飛び掛かり、

「喰らえ必殺…ぐへっ!」

「オイ痛いつて!その歯鋭くて痛いつてぎやあああ!」

「ゴメンなさい!!イヤマジでゴメンなさい!!」

勝てませんでした(はあと)

「…は、ハハツ。ようやくうつとおしいのがいなくなつて——」

ガシツ

「イヤ、惜しかったな」ボロツ

「どうやって戻つてきた!?!」

「ねえエルシャエルシャ!今腕がによーんつて!」

「ええそうねヴィヴィちゃん。あんまり見たくはなかつたわね…」

麦わらの海賊よろしくのリターンを目にし、ニッコニコなヴィヴィアンと頭痛を覚えるエルシャであつた。

オオオオ——ンツツ!!

空間を揺らがすような唸り声とともに、ガレオン級が再びヒルダとジーさんへ迫る。

「クソツ!こうなつたらあの《伝説の剣》を使うしかない!!」

「イキナリなんの話!?!つてかもう何でもいいからそこで大人しくしてろ!」

「その剣ははるか昔、世界を脅かす邪竜を倒した聖なる王子の腹心が使つたとされ——」

「人の話を聞け!! だいたいなもんどこにあるってんだ!!」

「ここにある!! はああー……」

目を閉じ、全身に力を込めるじーさん。

すると、その体が光り始めた。

「おい、まさか——」

「はああー……ツッ」

光は眩さを増し、その力はどんどん大きくなっていく。

そしてついに、

「はああー……ハアツ!!」

カツ!!

すぽっ

「……………」

じーさんの手により抜かれたソレは、一瞬滑らかなになびいてから、瞬時に硬化。
ジグザグという、剣としては歪なフォルム。

真紅に彩られた美しいその刀身は、陽光を反射し煌めく。

巨大な敵を討ち果たさんと握られたソレは——

ヒルダのツインテールの、かたつぽ。

「はあああああああああああ!??!?!?!」どびびびびん

「よっしやいくぜ!」

「今何が起こった!?!アタシに何が起こった!?!なんか頭の重心おかしいんだけど!!ヒルダ泣いちゃう!!」

「とりゃーッ!!」

「オイ待てジジィーッッッ!!」

ヒルダの悲鳴とともに、ジーさんは先程よりずっと高く跳んだ。
ガレオン級の頭上まで上がり、空中で剣を掲げる。
ほんの一瞬空中で制止し…

「G^じサンダーソー……ードツツ!!!」

落下とともに、縦一文字に振り下ろした。

「…ていうか、形が似てるだけじゃん」

「え、クリスわかんのかよ!?!」

「うん、スマブラ出てたし」

「はい?」

ザンツ!!

グギヤアア……ツ!?!

ガレオン級は首から腹まで一直線に切り裂かれ、激痛で悲鳴を上げる。

そこへ、間髪入れずに紫の機影が突撃した。

「ダメ押しだ、持っていきなアツ!!」

ゾーラのアーキバスが、腹の傷口へ容赦なく右手を叩き込み、その内側へ凍結バレットと呼ばれる必殺兵装をぶちかます。

ガレオン級は体の至る所から氷柱をつき出させ、断末魔の声を上げながら墜ちていった。

さらに言えば、今のが最後の一体。他のスクーナー級も全てゾーラとヴィヴィアンを中心に撃破され、壊滅。戦闘終了である。

で、じーさんと言えば、

「誰かぁー!!助けてくれー!!」

そのまま、重力に従ってぐんぐん落ちていっていた。と、そこへ、

「キャーッッチー!」

「おおっ!!」

ヴィヴィアンのレイザーが持ち前のスピードを生かし、猛追。見事、じーさんの体をその手に収めてみせた。

「イヤーすまん、おかげで助かった」

「どーいたしましたっ♪それよりスゴいねおっちゃん!ねね、今のどうやったの!」

「フフ、知りたいか?」

「知りたい知りたい!」

「いいからさつきとアタシのソレ返せボケエエ!!」

コクピットから顔を出し屈託ない笑みを見せるヴィヴィアン。

それにジーさんが気を良くするのも束の間、怒髪天のヒルダが変形したグレイブで猛接近してきていた。声だけでわかる、鬼の形相だと。

「うわちゃあ、ヒルダマジギレだあ」

「ホント短気なヤツじやのー、不屈のエースオブエースが聞いて呆れるわ」
「使い尽くされたネタ出してんじやねえよツ!!」

ヴィヴィアンと同じようにコクピットから身をのりだしてくるヒルダ。

その頭は、対の片方を失ったなんちゃってサイドテールと化していた。

「しょうがないのー。ホレ」

そう言つてグレイブに飛び乗ったジーさんは、元に戻ったヒルダの髪を頭へとくつつける。

ガキイイイイン!

「なんかあり得ない音したぞ?!?てめえマジでアタシになにしやがった!?!」

「まーそういう季節だから♪」

「そんな季節あるかクソ野郎ツ!!」

「おおっと」ピョイン

「すっげーヒルダ、ガンダムみたいじゃん!」

「お前後で覚えてろよヴィヴィアン…」

不穏な効果音とともに戻ってきた髪の手をしっかりと確認するヒルダ。なんの異常もないのが返って不気味であった。

グレイブからレイザーの肩へ飛び移ったジーさんに、ヴィヴィアンは問いかける。

「ところでさー、おっちゃん何者?」

「ワシか?」

その問いに、ジーさんは声高らかに答えた。

「ワシはでんぢやらすじーさん!世の中のありとあらゆる危険から安全に生き抜く方法を教えるプロじやー!っ!!」ばばーん!

「デンジヤラス爺さん、ねえ。名は体を表すとはよく言ったモンじゃないか」

「お姉さま?」

「こいつは、しばらく退屈しないで済みそうだねエ。フフ」

「あ、あはは……」

「推奨OP、「でんぢやらすじーさん愛の歌」
<http://youtu.be/8x3uDp8Qk>」

一方その頃、アルゼナルでは……

「………戦闘は終了。敵残存戦力、ありません」

「…第一中隊全機、損傷なし……」

「現在、ヴィヴィアン機に……えと、なにかヘンなのが……司令?」

「ス………ッ、フ………」

戦場をリアルタイムでモニタリングしていた司令室は、何とも言えない空気が充満していた。

そんな中でもどうにか声を絞り出し、職務を全うしようと努める3人の少女オペレーター達だったが、肝心の司令であるジルは、ただひたすらケムリを入れては出すひとに

なっていた。

「…ジル、それで何本目だい？」

「……22本」

「この短時間で一箱空けちまったのかい…。程々にしときなよ？」

「…ヨウスケ？あんたのおじいさん…人間？ノーマとか人間とか、そういう意味じゃなくって」

「うんまあ……一応」

「一応であんたね…。しかも何よその間は」

その中には、まごのイヤな予感に従って戦場の様子を見るべくやってきたジャスミン達の姿もあった。なお、ココは先程から口を半開きにして固まってしまっている。

「…少年、さつきはすまなかつたな」

「え!?あ、いや別に気にしてませんから…」

「アレとは一緒に暮らしているのか？」

「そうですけど…」

「そうか……。その歳で、随分苦労してきたんだらうな…」

「……ええ、そりやあもう…」

柄でもないが、今この時、少なくともまごこの少年に対しては、誰よりも優しくなれる気がし

たジルなのであった。

「……さて、監察官。これからどうしたものかな」

「静かにしてください司令。今、ミスルギ皇国で第一皇女アンジュリーゼ殿下の洗礼の儀が執り行われているんです。邪魔をしないでもらえますか?」

「……いや、すまなかつた。どうぞ心行くまで見ていてくれ」

監察官のエマは、マナによって開いている空間モニターを凝視している。どうやら皇室式典の中継を見ているらしいが、今は勤務中である。

常日頃は規律に人一倍厳しい彼女のそんな様子に、ジルは口を挟むことなど到底できなかつた。

チラリと戦場を映すモニターを一瞥してから、ジルはゆっくりと席を立つ。

「あつ、司令?どちらへ……」

「医務室だ。さつきから胃の痛みが酷くてな……。胃薬をもらってくる」

「そ、そうですか……」

「なんかもう、ホント色々ゴメンなさい……」

複数のいたたまれない視線に見送られ、ジルが司令室を後にしようとした、その時、
「……はっ?え、ええっつっ!?!」

中継を見ていたエマが、すつとんきような声とともに勢い良く立ち上がった。

「どうかしたのかい？」

「こ、こんなことが…」

「?」

ワナワナと震えるエマを怪訝に思い、ジャスミン達四人がその背後からモニターを覗くと、

そこには、自身が下等生物であると実兄から暴露され、呆然と立ち尽くすアンジュリーゼ・斑鳩・ミスルギの姿が映っていたのだった。

プリンセスアイタタ、じゃっ!

「1203—77ノーマ、アンジュリーゼ・斑鳩・ミスルギ。ミスルギ皇国出身の16歳……16歳ねえ」

「……………」

快晴だった日中とはうって変わり雷雨となった晩。

その一室は無骨で、精神的嫌悪感を感じる内装はいつそ時代錯誤的であり、真つ当なことに使われるのではないことが一目瞭然であった。

手元の空間モニターで資料を眺めるのはエマ。

その資料が示しているのは、目の前でただ呆然と立ち尽くす、豪奢なドレスに手枷と
いうミスマツチな格好をした少女のパーソナルデータ。

大国、ミスルギ皇国の第一皇女であるアンジュリーゼは今日、国中のあらゆる人々か
らの祝福とともに洗礼の儀を迎えた筈だった。

しかしその式典の最中、実兄である第一皇子ジュリオ・飛鳥・ミスルギにより、当人
ですら知らなかった秘密を暴露され、幸福な一日は一転、悪夢の始まりと化したのであ
る。

第一皇女、アンジュリーゼはノーマである。

人間から突然変異で生まれる、マナの光を拒む存在。

野蠻で凶悪で下劣とされる畜生。

そんなノーマであるというのだ、この自分が。

向けられていた数多の祝福は一瞬にして冷えきり、同じ数だけの…否、それ以上の憎悪が叩き付けられることとなった。

そして、母は自分を庇って……。

「マナを使えるよう見せかけるため、専属の従者が着いていたということですが…それにしてもよくもまあボロが出なかつたものですね」

「……ここはどこなのですか？」

目の前の眼鏡の女性が何を話しているのか、アンジュリーゼには理解できなかつた。むしろ、脳が理解を拒否していると言っている。

「私の身に、何が起こっているのですか…？」

今はただ、この悪夢から目覚めたい。この手枷おもしを外してほしい。

「…司令？どうかしましたか…って!?ちよ、待つ——」

どうか、夢なら覚めて――

「フン!!」

ズドムツ

「ぐえふ?!?!」

夢じゃなかった。何故なら、腹に刺さったボデイブローの痛みが本物だったから。

「ゲホツゴホツガホツおえツ!!」

「ちよつと!?!何をしてるんですかあなたは!!」

「なんだ?これくらい、今更珍しいことでもないだろう」

「それはそうですが、いくらなんでもいきなり過ぎるでしょう!?!」

「汚れ仕事はさつさと終わらせるに限る。監察官殿も、進んで見たいものではないだろう……もしや、そういう趣味をお持ちかな?」

「はあ!?!」

とは言うものの、本当であれば「上げて落とす」くらいのこととするつもりであった

ジル。

自分の見立てが正しければ、この「二元」皇女は計画の重要な切り札に成りうるかもしれない存在だ。初印象で己の立場を思い知らせておくに越したことはない。

しかし残念なこと…

「うぐ…」キリキリキリキリ…

ジルは、まだ胃袋おなかが痛いのだった。

——回想でゲス——

「…では、尋問を始める。まずは貴様らの出自についてから話してもらおう」

「フーン！ワガハイを差し置いて上から目線で話しおつて気に食わんのじゃない…。そんな話してほしくば…」

「ほしくば、なんだ？」

「カネよこせーっ？」「カネーン

「(#、3、)」「ピキ

「ねーねー、そんなヤツほつといつてワシに色々聞いてみ聞いてみ？」

「……貴様らは、どこからどうやってここにきた？」

「テメエに話すことなどねえ！」 ずうくん

「(##、ω、)」 ピキピキ

「あの、必要なことならオレが話しますから……」

「ええい、連中さえいなければ……」 キリキリキリキリキリキリ……

「……ああ、そういうことだったんですね……」

じーさん（と、食われた筈の校長）のお陰でジルの調子はすっかり狂わされっぱなしである。

尋問の内容にしても、わかったことといえば、

「マナもノーマもない、この世界の常識が通じない場所で暮らしていたということ」

「竜巻による超常現象に巻き込まれ、気付いたらアルゼナルだったということ」

おおまかには、この2点のみ。

実はジルとしては思い当たるふしが無いわけではないのだが、それにしても荒唐無稽な話であった。

そんなこんなで、ジルの肉体的、精神的疲労はこのわずか半日で相当なモノとなつて

おり、ぶつちやけさつきと部屋に帰って休みたいのが本音だった。

「立て」グイッ

「痛っ?! 離しなさい無礼者!!」

「黙れ。私は貴様の身の上話や言い訳など興味もないし聞く耳ももたん。いいな? 元皇女殿下」

「な、なにを…」

「お前は今日から「アンジュ」だ。身分も財産も何もないただの「アンジュ」だ」

「わけのわからないことを…きやあっ?!」

掴み上げていたアンジュリーゼ改めアンジュを無造作に下ろし、ジルは煙草を手に取り、

「所持品を没収し、身体検査を始める。監察官、準備を」

「わ、私に一体何をやる気なのですか!?!」

「いいから黙っている。なに、天井のシミでも数えていればすぐ終わる」

「もつと言いたい方というものがあるでしょう、まったく…」

嗜虐的なその笑みには、自身のストレス発散も兼ねているだろうことがハッキリとわかる。

そんなジルの物言いに嫌悪感を露にしつつも、エマはアンジュに歩み寄り、イヤリン

グネットクレス等の装飾を外すべく手を伸ばす。

「いやっ! やめなさい! 私はミスルギ皇国第一皇女、アンジュリーゼ・斑鳩・ミスルギなるぞ!」

「ああもう、じっとしてなさい!」

揉み合いになる二人を眺めながら、ジルは煙草をくわえてライターを取り出し、ニヤリとサデイスティックに笑った。

「さて…せいぜい使える程度に壊してやるとするか」

カチッ…

にゅーーっ

「……………」

「よう☆」

♪ライターつけたらにゆるっと（にゆるっと）

♪危険なじーさん登場（※ポンプコリン風）

「のお〜〜〜〜ツツツツツ」ズジビーン

!?!?!?!

ジルのライターから、まるで絵の具のチューブか何かのようにじーさんが姿を現した。もはや手品とかそんなチャチな次元を軽く超越している。

「どうじゃー！びつくりしたじゃろー？♪」

「どっ、どこからでてきた貴様アツ!!」

「イヤな、表のドアカギがかかっててのー。せつかくだからちよつと趣向を凝らしてみました◎」

「そんな化け物一直線な創意工夫はいりませんっ!!というか、そもそも鍵のかがついている部屋に無断で入るんじゃありません!!」

怪奇現象再び（それも至近距離）。

あたふたと距離を取る二人に、じーさんは「ところで」と要件を切り出した。

「さつき、身体検査をするとか聞こえたんじゃが…」

「貴様には関係ない。部外者はさつきと出ていけ」

「そうです!まさか、仮にも女性の身体検査を見たいと言うんですか!?破廉恥な!!」
「破廉恥じゃと?…いか…」

大口を開け迫ってきたじーさんに、二人はさらに後ずさる。

「身体検査はキケンじゃ!!オマエらには40分早いわーっ!!」

「短い!?!」

「何が危険だ。貴様に口出しされる謂れなどない!」

「いいや、オマエ達はわかっとなん!いいか?身体検査がどれくらいキケンかとゆーと
…」

「しんたいけんさをはじめるぞー」

「やめてー、いたくしないでー」

「えーい」

ずぶっ

「アツーーー」

ドカーーーーン!!!
!!!!

「ぎゃーっ！！！！」

「こつ、これくらい……」ガクガクブルブル

「(身体検査関係ねえーっ)」なすくん

爆発への脈絡が意味不明過ぎだった。

「というワケで、ワシがオマエらに安全な身体検査のやり方を教えてやるぞーっ！」

ブイサインのじーさんにエマがどうしたものかと頭を抱える一方、ジルは予想外の返答をした。

「……わかった、聞くだけ聞いてやろう」

「司令!？」

何故!?!と振り向くエマに、ジルは顔を寄せて耳打ちをする。

「(ヒソヒソ) このままでは時間を無駄にするだけだ。なら、下手に刺激せず言わせたいだけ言わせてしまったほうが早く済む」

「(ヒソヒソ) な、なるほど一理ありますね。それでいきましょう！」

簡潔に打ち合わせを済ませ、二人は改めてじーさんに向き直った。

多少のことでは動揺せぬよう覚悟を決めて。

「よーしいくぞー! 簡単じゃからしっかり覚えてねー?」

「は、はーい」

「まず、両手の指を10本生やせ!」ウネウネウネウネウネウネウネウネウネウネ

「できるかー!」ウネウネウネウネウネウネウネウネウネウネ
「ぬびびーん」

するだけ無駄だった覚悟(笑)。

「えーつできねーの!?! そんなんじや嫁にいく時笑われちまうぜー!?!」ウネウネウネウネウネ
ネ

「黙れ糞髭!! 貴様は私達を何処のエイリアンに嫁入りさせる気だ!?!」

「なーにが不満なんじや!?! 寄生獣みたいでカッコイイじやろーが! ミギーにヒダリーで
なんか得した気分だろーがオイ!」ウネウネウネウネウネ

「そんな奇形になつてまで得したくなどありませんツツ!!」

ウネウネにゆるにゆる変形する謎のナマモノと、それと言い合う女性二人。

「…なに? なんなの? なんなの 一体…!?!」

そんな奇妙な光景を、アンジュは部屋のすみで顔を青くして見ていた。

「悪夢だわ…こんなの悪夢に決まってる！」

ただでさえいっばいいいっばいだった彼女の精神は、いよいよ限界を迎えていた。

「た、助けて…」

半ば忘れ去られてしまった少女は、恥も外聞もなく悲鳴をあげるのだった。

「助けてモモカぁー…っ！！！！」

…その後、なんやかんやでアンジユの身体検査はお流れとなり、そのまま忘れられ実
施されることはついになかったそうなの。

「…えー、ではおさらいしておきましょう」

D i m e n s i o n a l

R i f t

A t t u n e d

G a r g a n t u a n

O r g a n i c

N e o t o t y p e s

「訳すると、「時空を越えてやって来る巨大敵性生物」となり、頭文字を取って「ドラゴン」と呼ばれています」

「でい、でいめんしよなる…ええつと…」

「ごちやごちやしてて覚えづらいのー」。

D a i k o n

R e n k o n

A s u p a r a

G o b o u

O o b a

N i n j i n

…で充分じゃろ」

「ただ野菜並べただけじゃねーか！」

翌日、じーさんは幼年部の子供達に混ざり授業を受けていた。

その背後には、授業参観よろしく…実際は監視目的のジルとエマの姿がある。

正直、ジル達からすればじーさん達は色んな意味で不穏分子以外の何物でもないのだが、昨日のデタラメぶりからして、ただ幽閉しただけで抑えられるモノではないというのもまた明白。

ならば、アルゼナルでの常識をきちんと把握させておいたほうが、無知のままおかしな暴走かまされるよりかはマシだと考えたのだった。

じーさん達にしても、見知らぬ場所でも何もわからないまま居心地の悪い思いはしたくなかったので、渡りに舟であった。

ただし、

「じゃい〜…」 ちくん

コイツは例外だった。

「しっかし、見事なアイアンクローじやったのー…文字通り」

「うん…まあ、校長先生の自業自得だけど…」

校長は気絶し、椅子に縄で縛り付けられていた。

連れてこられた初めに、

「先生であるワガハイがガキ共と授業なんか受けてられるかーっ!!」

と、教師役の女性を押し退け教壇を占拠し、自分のエラさについて演説を始めようとしたのだ。が、ジルから義手でのアイアンクローを顔面に喰らい、断末魔と共にあえなく撃沈したのである。

そして、ジーさん達に並んでもう一人、授業に対し上の空の人物がいた。

「……」

アンジュである。

彼女もまた、急遽幼年部の教室に机が用意された一人だ。

しかし、その目は常に机の表面に注がれ続けており、ずっと無反応を貫いていた。

まるで、自分はここにいないとでも言うかのように。

「……ウーム……」

そんなアンジュを、ジーさんは時折横目で見ていたのだった。

「ノーマはドラゴンを倒すための兵器としてのみ、生きることが許されます。そのことを肝に命じ、戦いに励みましょう」

「イエス・ママ!」

ノーマの子供達が元気良く斉唱する。

授業も一区切り付き、それを見計らってジルが口を開いた。

「大体こんなところか。わかったか、お前達」

「……………もうすぐ、ミスルギ皇国から解放命令が、届くはず、です……………」

「…ふっ」

それに対しアンジュは絞り出すように一言ゆつくりと呟いたのだが、それは返答ではなく自身に言い聞かせるための呪文であった。

「オツケーオツケーマジオツケー♪もうドラゴンだろーとドラゴンボールだろーとなんでもこいつっの♪」

「ヨウスケはどうだ？何か分からなければ言ってみろ」

「(シカト!?)」

「え、ええつと…じゃあーっだけ」

軽くシヨツクなじーさんを横目で見つつ、まごは恐る恐るその場で起立する。すると、

じいっ

「ウツ!?!」

教室の子供達…のみならず教師の女性の視線までもが、まごへ一斉に集中した。

その目は個人差こそあれ、いずれも初めて見る男子に興味津々といった様子で爛々としており、まごはおっかないやら気恥ずかしいやら。レーザービームでも出てるんじゃないかという錯覚に陥るほどであった。

ちらりとジルへと目を向けてみても、苦笑とともに首を振られてしまう。「諦めろ」ということらしい。

「(や、やりづれえ…)」

しかしもう立ってしまつた以上、「何でもないです」で着席するのも気まずい。ひきつる頬をどうにか抑え、咳払いを一つ。まごは自分の純粹な疑問を口にした。

「どうして、ノーマの人達はこんなに差別されるんですか？」

ぼかん、と場の女性全員が呆気にとられ、固まつた。

「マナとかノーマとか、その辺りのことは大体わかりましたけど、でもマナを使えない人がノーマなら、マナを使える人達はそれを助けようとか、そういう風には思わないんですか？」

それは、小学生でもう学ぶことである。

例えば、盲目の人。難聴の人。足腰が不自由な人。

そういった、一般と比べ身体能力的に劣ってしまったっている人達を助け、できるだけ平等に、社会の一員として共に生きようするのが健全者のあるべき姿であろう。

それは、マナを使える人間使えない人間にしても、同じことではないのか？まごはそう思ったのだ。

暫く沈黙が続き、まずエマがずり落ちた眼鏡を直しつつ、呆れ半分、怒り半分といった表情で口を開いた。

「あな——

「あなたは、何を言っているのですか」

そんなエマをも遮り、唐突に立ち上がったのは、アンジュ。

「あ、アンジュ…:さん？」

「ノーマは、人々の幸福の光であるマナを拒絶する、反社会的で、暴力的で、下劣な生き物…:人間ではないのです」

それまでの無口ぶりがまるで嘘だったかのように、アンジュの声は流暢に、そして大きくなくなっていく。

「あなたがどこの田舎者なのかは知りませんが、今まさにここでの授業を聞いていたで

しよう!?!居眠りでもしていたのですか!?

ノーマは淘汰されて然るべき穢れた存在なのです、疑問の余地などありません!
男性のノーマと聞いて半信半疑でしたが、どうやら本当だったようです。そんなことを考えているから、マナの恩恵を失った非人間に――」

「黙れ!!」

「ツ!?!」

重なつた一喝。

アンジュの身をビクリとすくませ、口を閉じさせたのは、

「おじいちゃん……ジルさん……」

じーさんは、まごでも滅多に見ないような目付きでギロリ、とアンジュを睨む。

ヒツ、と短い悲鳴が上がった。

「……今回は見逃してやろう、アンジュとやら。じゃが、もしまたワシの愛するまごに「非人間」などと口にしたら……その時は、容赦せんぞ」

「あ……つつ」

気圧されるままに、アンジュはゆっくりと腰を下ろしていった。

「(ほう……。得体の知れない妖怪だとばかり思っていたが、なかなかどうして言うじやないか)」

そんな中で、ジルはジーさんへの評価を少しだけ改めていた。

しかし表情には出さない。

「すまん、ヨウスケ。…だが、アンジュの言うことはあながち間違ってもいない」

「えっ?」

「ノーマが差別される理由。それは、結局の所…」

ノーマが、ノーマだからさ」

言い切るやいなや、ジルはアンジュの腕を掴み無理矢理立たせ、硬直したままの周囲を置き去りに歩き出した。

「監察官、アンジュの教育課程を修了。本日付で第一中隊に配属する」

「…はっ、え?だ、第一中隊!?!」

「はっ…離して!離してください!!」

「司令!ちよつと、待ちなさい!」

そのまま、ジルはアンジュを引き摺りながら、エマはそれを追うようにして、教室を後にしていった。

「まご、ワシらもついてってみよーぜ?」

「え、なんで?」

「いいからいくぞーっ」

「ちよ、おわっ!?!」

さらにじーさんとまごもまた、ジル達を追って出ていったのだった。

しーん……

「せんせー」

「…はいっ!?!あ、え?どうしたの?」

「これ、どうするの?」

「じゃいい……」

「」

はくじめましてはドクキドキくじやつ！

「ねえ、司令と監察官の後ろにいるのって…」

「ああ、アレが噂の…」

「実はノーマだったミスルギ皇国のオヒメサマと、世界初の男の子のノーマ…」

「それと、ドラゴンを生身で叩つ切ったって言う……えつと」

「…うんと」

「あの…」

「「なに、アレ…？」」どびくん

「見ろまごよ、女のコ達がワシらのことをウワサしちよるぞ。イヤくモテる男は辛いのくひやつひやつひやつ♪」

「ウワサの意味合いが違ふと思うよおじいちゃん…」なすーん

「……………」

ジルを先頭に通路を歩く一同。

教室を出てからこれまで何人かのノーマ達とすれ違っていたが、彼女らの取るリアクションは皆同じであった。

アンジュとまごを興味深げに眺めた後、視線がじーさんに行つたところで、皆一様に困惑を浮かべるのである。

一方でジルとエマ、そしてアンジュは無視を決め込んでいた。余計な疲労を避けるため、そして胃袋の平和のため、だ。

もつとも、アンジュのそれはまた意味の異なるものであったが。

「ところでジルよ、ワシらをドコへつれてくつもりなんじゃ」

「……私が連れて出たのはアンジュだけだ。貴様らまで呼んだ覚えはない」

「まーそうカタイこと言うなって、ワシとオマエの仲じゃろー?」

「黙れ。付いてきたければ勝手に付いてくればいい……、ただしその耳障りな口は閉じておけ。縫い合わせられたくなければな」

「ホント可愛げのないヤツじゃのー、読者人気落ちてもワシや知らんぞ?」

「……チツ」

やれやれと肩をすくめるじーさんに、憎々しげに舌打ちするジル。

「(読者人気とか以前に、オレ達の立場がどんどん危うくなつてつる気がする……)」

「……はあああ……」

そんなやり取りに、まごは顔を青くしひきつらせ、エマは盛大な溜め息を吐くのであった。

そんなこんなしつつ、やがてジルが一つの扉の前で歩を止め、脇のコンソールを操作する。どうやら目的地のようだ。

操作を受け付けて、自動で開いた扉の向こうには、ボックス型の機械らしきものがズラリと並んでいた。側面には扉がそれぞれ付いており、中に入れるらしかった。

「なんじゃアレ？」

「なんの部屋なんですか？(ここん)」

「シミュレーター室です。ここでライダー達の操縦訓練を行っています」

「アンジユ、あそこにいるのがお前の同僚達だ」

「え……？」

ジルが顎で示した先には、こちらに背を向けるゾーラを中心に第一中隊の面々が集まっていた。中には、ココとミランダの姿もある。

「あ、jeeさんだ！おーい！」

「おーヴィヴィアン」

「げ……」

いち早く気付いたヴィヴィアンが、棒付きキャンディをくわえたままじーさんへ元気良く腕を振る。

その一方でヒルダが露骨に顔をしかめた所で、ゾーラも振り向きジルの姿を確認すると、手慣れた様子で敬礼してみせた。

「司令官に敬礼!」

それに続き、他全員も一斉に敬礼。新人二人が半拍ほど遅れたのはご愛嬌。

ジルもまた軽く敬礼して返し、アンジュを伴って歩み寄っていく。

「ゾーラ、例の新人だ。…余計なおマケもついてきているが、あとは任せる」

「イエス・マム。司令はこれからどちらへ?」

「……医務室だ」

ジルは吐き捨てるように言うと、エマを連れてツカツカ足早に出て行ってしまった。

「…お大事に」

そんなジルの疲れた背中を、ゾーラは苦笑とともに見送ったのだった。

「ようこそ、死の第一中隊へ。あたしが隊長のゾーラだ」

「死つて、随分と物騒じやのー…」

「ハツ、まあ違うないが、アルゼナル^じじゃ一番実入りがいいからね。それより、昨日は世話になったねえ、デンジャラス爺さん?」

「ちがーう!!」グオツ

「っ!？」

と、突如普段の5倍ほど巨大化したじーさんの顔面が眼前に迫り、さしものゾーラも思わず後ずさる。その後ろに控えている少女達も、一様にビクツと体を震わせていた。

「ワシはでんぢやらすじーさん!!間違えてんじやねーよツ!!オマエそれググツた時

もしかして↓でんぢやらすじーさん

って出てくるお決まりのヤツだからなえーコラ!!」

「あ、ああわかったよ、悪かったね。悪かったから顔はさっさと戻してくれ…」

「ーったく」

しゆるしゆると元のサイズに縮んでいくヒゲ面を目の当たりにして、第一中隊は改めて思った。

やっぱコイツ、人間じゃねえ…と。

「ありがちなマチガイしおつてからに…ん?」

ふと、じーさんは違和感に気付いた。

先程から、隣のまごが微動だにしないのだ。

「まご、どうしたんじゃ？腹でも痛いのか？」

「……………」

「…んん？」

固まったままのまごが、口を半開きにしたまま見つめる先。それは…

ヒへポイーン

ゾへポポイーン

エへポポポイーン

サへないーん

おっぱいが、いっぱい？

「なに見てんだテメエクソまごーっ！ツツ!!」ジジイパンチ!!

「びやーっ！つっ!?!」ドカーツ!

じーさんの容赦ない拳がまごの顔面に炸裂した。

「いつ、いきなり殴るコトないだろーっ!?!」

「うるさーい！このドスケベ!!ここぞとばかりにガン見しおつて、オツパイ星人かオマエわー!」

「ペっペペペっにつおんなコトねーしっ!!」

「声裏返して喋るな!!」

「……ミランダちゃん、男の子ってみんなああなのかな…?」

「あたしにだってわかんないわよ、そんなの…」

「…ヨウスケくんのえっち」

嗚呼、悲しきは男子の本能か。子供であろうと大人であろうと、男はおっぱいを求めずにはいられないのか。

かく言う作者も子供の頃は、近所の林に捨ててあったピンクチラシを…やっぱ何でもありません。

「…ねえ何故かしら。私、今すつつつごい不愉快な扱いをされた気がするんだけど」

「あら、急にどうしたの?サリアちゃん」どたぶーん

「……くっ!!」

「まあ、サリアじやエルシャの四次元バストには敵わないにやー」

「怒るわよヴィヴィアン…」

なくはないです。

それはさておき、実際問題としてまごが釘付けにされてしまったのも、まあ致し方ないと言えよう。

第一中隊全員が着ているのは、メイルライダー専用のライダースーツ。

これは胸元が大きく開き、おなかは丸出し、内腿も丸出し、と非常に露出度の高いデザインとなっていた。

長期の任務や待機時の排泄の利便性など、諸々の事情を考慮した結果、こうなったのだと言う。ホンマかいな。

「つーかオマエら！そんなヘンタイチックなスーツ普通に着こなしてんじゃねーよ!!ワシがむしろ間違ってるのかと一瞬自分を疑ったつっの!!」

「と言われても、これが正規の服装だからねえ。…それよりボウヤ?」

「…へっ!?!」

ゾーラが腰を曲げ妖艶な笑みで、顔を赤くしたまごへずいと迫った。

そうなれば、顔と顔はまさに目と鼻の先。おまけに視線を少し下にやれば、赤い花柄のタトウーの入った豊満な谷間が飛び込んできってしまう。

「フフ、お姉さん達のカラダに興味津々ってわけかい?まだーって聞いてたが、随分とおませさんじゃないか。…それとも、男つてのはそういうモンなのかねエ?」

「いついっやっ、あのその…」

至近距離であるがゆえ、ゾーラが喋ればその微かな吐息がまごの口元をくすぐつていく。

まだ思春期にも入っていない少年には、いささか刺激的すぎた。もはや、まごの顔は茹で蛸の如くまっかつかである。

「すつかり緊張しちまつて…可愛いねエ。実を言えば、あたしも男あんなに興味津々でねえ…
教えてくれないか？ 女あたしたちと違うトコロをイロイロと、さ…」

「え、えええ…」

そろり、とゾーラの右手が動きだす。

指先がゆつくりとまごの下半身へと伸びていきそして…

「イイ加減にしろカラー…ツツ!!!」ジジイキーツク!!

「おっと」ヒョイ

「びよ…びよ…?!?!」バキイッ!

じーさんが背後から跳び蹴りで強襲。

しかしゾーラにはあつさり避けられてしまい、その一撃はまたもまごへと見舞われることとなり、少年の身は哀れにも吹っ飛んでいつてしまった。

「急に何すんだい、危ないじゃないか」

「危ないじゃないか、じゃねーよ!! オマエこちとらかれこれ15年よい子のコロコロで連載続けてんだぞ?! そんなガチでまいっちんぐ? な展開許されると思ってんのかーっ?!」

「別に構わんさ、どうせ画面の向こうは大きなお友達しかいやしないんだ」

「身も蓋もないコト言ってるじゃねーよ!!」

「おじいちゃんそれ…似たようなやりとりもうしたよ…」

「ヨウスケくん大丈夫!？」

先ほどのパンチに続きキックまで喰らい、倒れ込んだまごを流石に見かねたらしいココが駆け寄ってくる。やや遅れてミランダも一緒だ。

「あてて…」

「ちよつと、大丈夫? あのじいさん容赦なさすぎでしょ」

「ハハ…まあ大したことないから」

「本当に? 無理しちゃダメだよ?」

「ウン、ほんとに大丈夫…ぶ…」

「?」

忘れないでいただきたいが、先述したヘンタイチックなスーツは、第一中隊全員が着

込んでいる。

もちろんココとミランダも例外ではなく、まごの視線はいやが応にもその大きく晒された慎ましい未成熟な胸元へと注がれ……

「……っ!?」

瞬間、少女二人もまた茹で蛸と化した。

「ヨウスケ（くん）のエッチ!!」バチコーン!

「ぶべら!!」

おもつくそひっぱたかれました。本当にありがとうございます。

「今日オレ殴られてばかり……」

「ああっ!?ご、ゴメンねヨウスケ!つい……」

「ごご、ごめんなさい!本当にごめんなさい!痛かった?痛かったよね!」

「いや、ウン、オレのほうこそマジでごめんなさい……」

「……まごがだんだんラブコメ主人公みたくなつとつとる……」

「クク、初々しいねエ。まとめて食べちゃいたいくらいだよ」

「んっ…ゴホン!」

困惑するじーさんと舌なめずりをするゾーラ。

その背後で、これ見よがしに咳払いを1つしたのは、サリア。

「隊長、お遊びはそれくらいにして、そろそろ…」

「っ…」

サリアが横目で指し示したのは、所在なさげに棒立ちしているアンジュ。

自分に注意が向けられたのに気付き、庇うように身を縮こませていた。

「おつと悪い悪い。すっかりほったらかしにしちまったねえ」

「ち、近寄らないで!」

拒絶するも当然の如くスルーされ、アンジュの目の前に迫ったゾーラは、その体を上から下まで舐めるように眺めていく。下からまた上まで戻り一往復したところでニヤリと、まごへ向けたものと同種の笑みを浮かべた。

「せっかくの初顔合わせなんだ。そんな所で突っ立ってないで、前へ出な」

「ひっ!?!」

横へと歩を進めたゾーラの手が、すれ違いざまアンジュの尻をヌルリとこれまた舐めるように押し出した。いつそ堂々たるセクハラぶりであるが、ゾーラにとってはこの程度日常茶飯事である。

「副長、紹介してやんな」

「イエス・マム。パラメイル第一中隊副隊長、サリアよ」

不敵に笑うゾーラとは対照的に、サリアは淡々と自己紹介を済ませ、他の隊員達を一人ずつ指していく。

「こつちが突撃兵のヴィヴィアンと…」

「やっほ♪」

「……」

アンジュが前に出されたことで、まごは先ほどの事を思い出していた。

「ノーマは、人々の幸福の光であるマナを拒絶する、反社会的で、暴力的で、下劣な生き物…人間ではないのです」

「ノーマは淘汰されて然るべき穢れた存在なのです、疑問の余地などありません！」

「…まごよ」

「あ…何? おじいちゃん」

「さっきのことなら、気にするな」

「えっ?」

「ずばり考えていたことを言い当てられ、そんなに顔に出てたのかな、とまごは目をパチクリさせる。

「ヒトの考え方は国や地域によつて様々じゃ。じゃが、それ以前にヒトとヒトは同じ生き物同士…差別なんてものは、ヒトの身勝手な思い込みに過ぎないんじゃ」

「おじいちゃん…」

「オマエのキモチは決して間違つておらん、だから胸を張るんじゃ。アンジユもいつかきつと、わかってくれる日がくるハズじゃろう」

「…うん、そうだよね!」

「にこやかにそう告げるじーさんの言葉に、まごは自信がつくのを感じた。ハッキリとしたその語調には、それだけの説得力があった。

「(やつぱり何だかんだ言つても、おじいちゃんはスゴいや)」
改めてそう思うまごであった。

「軽砲兵のロザリーに、重砲兵のクリスと——」

「これ……全部ノーマなのですか」

「」

「はっ、アタシたちノーマは物扱いか」

「このアマ……！」

「そうだよ、みんなアンジュと同じノーマ！仲良くしよーね♪」

「違います!!私はミスルギ皇国第一皇女、アンジュリーゼ・斑鳩・ミスルギです！断じてノーマなどでは——」

「言ってるそばからカラー……ッッッ!!!」ポチッ

「ササキ！」ずど——ん!!

「ありま……っつっつ?!?!?!」

アンジュ、おし(りに)つぶされる☆

じーさんがハラマキから何かのボタンを取り出し、押した瞬間、ゴリマッチョでブーメランパンツ一丁のおっさんが、胡座をかき腕組みしたポーズでアンジュの頭上から

降ってきて下敷きにしたのである。ケツで。

おっさんはたらこ唇で半眼、ハゲ頭の両対に1つずつ髪の毛の房がちよこんと生え、額には「ささき」と平仮名で3文字書かれていた。

「人がせつかくフォローしてやったつーのに速攻でぶち壊してんじゃねーよ!! チョーシに乗ったらブツ飛ばすって前回言ったばっかだろーがテメー!!」

「ググツ…しっ、知ったことではありません!! このつこのつ…:どきなさい不埒者!!」
「……」

なんとか抜け出そうともがくアンジユだが、おっさんの尻はビクともしない。

「いやていうか、どっから出て来たんだよコイツ…!?!」

「そそ、そうだよ! アルゼナルは男子禁制だったんじゃねえのか!?!」

「つつこむとこそこじやないよ口ザリー!」

「おおくっ! またムキムキだあ!」ペタペタ

「ヴィヴィちゃんっ、無闇に触っちゃダメよ!」

「ヘエ…こいつはなかなかイイカラダしてるなア」ペタペタ

「隊長まで何してるんですかつ!! ちよつと! 何なのよこの人は!?!」

「ム?」

サリアが唾を飛ばすかの勢いでじーさんに迫る。

「彼は《おしおきのささきさん》。ワシの古い友人で、いざというときに呼べば駆けつけてくれるんじゃない」

「その割には随分前に一回出たつきり出番なかったよーな…」（※絶体絶命7巻参照）

「呼べばって…でも確かに上から…いやでも天井にそんな仕掛けは…いやいやいやいや…」

うんうん唸りだすサリアだが、この手のギャグマンガにマトモな論理を求めることもそもそもの間違いである（真理）。

「くっ…このおっ…」

「さて、アンジュよ。少しは反省したか？」

ささきさんの下でもがくアンジュにじーさんは声をかける。

しかし、

「誰が！汚らわしい分際でっ!!」

その口は一切改まるどころを知らず、なおも噛みつかんと罵声を上げた。

「ムウ、往生際の悪いヤツじやの…」

「黙りなさい！マナを扱えない下等な存在のくせにッ」

「でもアンジュも使えないんでしょ？マナ」

ヴィヴィアンがさらりとそう口にする、怒りを湛えた目に明らかな動揺が浮かぶ。

「そ、それは一時的にマナの光が届かないからで、この島から出れば…」

「…クツ、ハツハツハツハツ!!」

突然、ゾーラが大きく笑った。何事かと全員の注目が集まる中で、彼女はやれやれと首を振る。

「司令め、とんでもないのを回してきたな…、状況認識も出来てないんだ不良品じゃないか。これなら、落ち着いてる分じーさんとボウヤのほうがよくぼどマシつてもんだ」

「(イヤそれはどうだろう…)」

珍しく、サリアとヒルダの意見が合致したが声には出さなかった。

「はは、不良品でしかもオツサンの尻に敷かなながら粹がつてんすかアコイツ?」

「ウワア痛すぎ…」

ゾーラに同調し、ロザリーとクリスもまた見下ろし見下し嘲る。この二人、常日頃からゾーラをお姉様と呼び慕っていた。

「なにを、不良品はお前達の方で…っ!?!」

ダンツ、と再び口を開こうとした眼前が、白いブーツで勢いよく踏み鳴らされる。ヒルダだ。

「流石はハイソなお姫さま、そんなザマでも上から目線とは恐れ入ります…でも」

這いつくばるアンジュに顔を寄せ、ニヤリと笑う。

「身の程をわきまえな、痛姫」

「くっく」

対照的に屈辱で顔を歪めるアンジユとヒルダが睨み合う。
まさに、その時だった。

ブブーツ

「……………／／／」

ささきさんが、恥ずかしげに頬を染めた。

「※☆¹⁸×♀▽[♯]△□ω^{ゑる}(株)◎?+AZくくくく?!?!?」のくん
少女が二人、声にならない悲鳴をあげた。

ささきさん、ついうっかり尻をこいてしまったのである。

「うわおキョーレッツ…」

「ヒルダちゃん昨日から踏んだり蹴ったりね…」

さしものヴィヴィアンとエルシャもドン引きだった。

「アツハツハツハツハツハツ!! あんたも存外マヌケだねエヒルダ!!」

「だーっはっはっはっ!! バツカでー! だっひゃっひゃっひゃっひゃっひゃっ!!」

「(サイテーだこの人達...)」どびくん

身悶える二人を尻目に大爆笑のゾーラとジーさん。

ささきさんよりむしろそんな大人二人にドン引きのまご達年少者トリオであった。

「ハツハツハツ...ふう。さて、いい加減遊びはここまでだ」

ようやくと落ち着きを取り戻したゾーラが、表情を引き締め全員を見渡す。

「これより訓練を始める! エルシャ、ロザリー、クリス。一緒にきな、遠距離砲撃戦のパターンを試す!」

「はい!」

「サリア、ヒルダ、ヴィヴィアンは新人教育! しっかりやれ!」

「はい!」

「...はい」

「ジーさんとボウヤは好きに見学していきな、あたしが許可する! ただし妙なちよっかいは出すんじゃないよ?」

「おーうおっけー☆」

「(大丈夫かな...)」

「よし、全員かかれ!!」

「イエス・マム!」

ゾーラの号令で、少女達が一斉に動き出したのだった。

なお、ささきさんはアンジュとヒルダに頭を下げると、普通に扉を通って去っていき
ました。

「ちなみに、ささきさんの出番は当分ありません」

「(イミねえーっ)」ズビーン

マズいメシで戦ができるかーっ!!じやつ!

「例の新人ですが、基礎体力、反射神経、格闘対応能力、更に戦術論の理解度。全てにおいて平均値を上回っています」

「随分と優秀じゃないか」

「ノーマの中では、ですが」

アンジュが第一中隊に配属されて数日、ジルはエマと共にその間に行われた体力テスト及び訓練等の報告書に目を通していた。

結果は上々。厳しい内容であったが、アンジュは元皇族という肩書きに似合わぬ身体能力でついてきていた。文武両道で通ってきたのが功を奏したのだろう。

もつとも、当人としては甚だ不本意だろうが。

「(加えて、パラメイルの操縦技術にも光あり、と…。フ、まったくもって都合がいい)」
ジルが内心でほくそ笑む中、エマは眼鏡を軽く直してから、さらに続けた。

「それと、例の老人ですが…」

「すまないが用事を思い出した。失礼する」

「待ちなさい」

ジルはにげだした！

しかしまわりこまれてしまった！

「司令…気持ちよ〜くわかりますが、自分が無視していい立場でないのはわかりきっていることでしょうか？」

「…ああ、わかっている。ああわかっているとも。…で？」

「…はああ……。ええとですね…」

【居住区画・通路にて】

校長 「おのれあのクソ鉄腕女め、ワガハイを散々コケにしおつて〜」

校長 「ならば、ヤツの部屋に忍び込んで…」

校長 「ヤツの服という服（パンツ含む）に《校長！エライ！世界一！イカす☆》と油性ペンでサインしまくつてやるのじゃーい！！」どーん！

じーさん《スイツチグツ←》

ドカーーン!!

校長「かしもとーッーッツツツ?!?!?」

まご「…まあ、そらそうなるわな」

【倉庫にて】

まご「おじいちやーん!どこー!?!」

ココ「おじいさーん!」

ミランダ「つたく、いい年したじいさんがかくれんぼだなんて…。つていうか、ホントどこに隠れたのよ…」

まご「おじいちやーん!もうギブアップだから出て来てよーっ!」

じーさん(平面)「やれやれ、だらしないヤツラじやのー」ぺらーん

ま・ミ「どおオーオーっつ?!?!」ビツクウ

ココ「こつ、コンテナの間のほっそいスキマに?!?!」

じーさん(平)「かくれんぼもロクにできんとは…これじゃから現代っ子はまったく
!」ぺらぺら

まご「できるのはオマエだけじゃーっ!!」

ミランダ「いーからさつさと元に戻りなさいキモチ悪い!!」

【パラメイル格納庫にて】

校長「ちくしよー、じーさんまでもワガハイの邪魔をしくさりおつて〜」

校長「なら、ここにあるロボットを改造して…」

校長「ワガハイ専用の《校長☆スペシャルブリリアントカスタム》にして鉄腕女とも
どもギツタンギツタンにしてやるのじゃーい!!」ばーん!

?「そうはさせないぜ!」

校長「ムツ!何奴じゃい!?!」

♪ナナナナナナナナナ7階! (7階!)

♪ナナナナナナナナナ7階! (7階!)

♪ワンツースリーフォーファイブシックス! なな!

♪住宅、ヒーロー、7階建てマ〜ン!

7階建てマン「オレは住宅ヒーロー、7階建てマンだベイベ! オレの頭の7階建てがある限り、キサマの好きにはさせないぜ!」

校長「何をこしやくなく。ならばキサマから先に血祭りにあげてやるのじやい…!」

7階建てマン「望むところだベイベ! かかってこい!」

校長「舐めるなよ、勝つのはワガハイじゃーい!!」

7階建てマン「いくぞお!!」

「うおおおおおおおおつ!!」

じーさん《グイッ←》

ドカーーン!!

校・7 「さわだーッッッ?!?!?」

まご 「今のヤツなに!?!?」 ずべーん

メイ 「つてかアンタ達何やってんのお?!?!? だれか消火器! 早くっ!!」

「い、イエス・ママ!!」

【幼年部にて】

おちんちんのうた

作詞・作曲　じーさん

♪おちーんちん、おちーんちん、おちーんちん（チャツチャラくチャツチャラく）

♪おちんちーん、おちんちーん、おちんちんちーん

♪おちーん、おちーん

♪はあ~~~~~

♪おちんちーん（チャツチャツ!）

女の子「なにそれ、ヘンなうたー」

じーさん「そんなことはないぞー? コレはワシのいたところじゃオマエ達ぐらいの子供はみーんな歌ってるんじやぞー?」

少女達「へえええええ……」

じーさん「よし、それじやみんなと一緒に歌うのじやー!! サン、ハイ……」

まご「トンでもない大ウソついてんじやねえーッッッ!!!!」ぐおーっ

エルシヤ「あらあらまあまあ……ウフフフフフフフフフフ」

ヴィヴィアン「笑ってるけどむっっちゃ怖ーッッ!!」

【医務室前にて】

校長「くそくそ、悔しいが一人では限界があるのじやい……。オイキサマ!」

アンジュ「……なにか?」

校長「喜ぶがいい! 鉄腕女に齒向かう者同士、特別にキサマをワガハイの部下にしてやるのじやーッ!」ぼーん!

アンジュ「はあ!? いきなりなんなのですか!」

じーさん《グツ←》

ドカーーン!!

校・ア「あなくぼーーッッ!??!?」

まご「(アンジュさん何もしてないのに巻き込まれたーッ!!)」どびーん

アンジュ「なぜ、わたくしま…で…」

マギー「はーい、ケガ人2名ごあんない♪」

「……と言った具合で、基地内のあらゆる場所で騒動を起こしており、また火薬の無断使用による物的損害や負傷者も報告されています」

「……………」キリキリキリキリキリ

僅かな間で予想を超える惨状となっている事実、ジルは頭を…いや胃の辺りをおさえた。

「…ジル司令」

そんな苦悶を浮かべるジルの肩に、エマは優しく労るように手を置いた。

「エマ監察官…」

「一緒に行きましよう。医務室…」キリキリキリキリキリキリキリ

「…ああ、そうしようか」キリキリキリキリキリキリ

普段はあくまで仕事上の関係でしかない二人。

しかし、この時ばかりは心と心が通じあつたような、そんな気がしてならないジルと

エマなのであつた。

時間はお昼時、食堂は昼食を取るノーマ達で賑わっていた。

そんな中で、階段を上がった上段の隅の席で、食事の盛られたプレートを睨み付けている者がいた。

アンジュである。

「……」

スプーンを手に取り、手前のライスへと差し入れてみる。

ニチャア…というねばついた音がして、つまりは明らかかな水分過多を物語っていた。

「…はーっ……」

ため息をもらしつつスプーンを下ろし、アンジュは額に手を置いた。

ここ数日、激しい訓練が続いていたこともあり我慢していたが、それもいよいよ限界を迎えつつあった。

ここを出される食事、ハッキリ言ってメシマズも良いところなのだ。

アンジュは思う。自身の舌が肥えているのもあるだろうが、それにしてももう少しどうにかならないのかと。

食べれば食べるほど食欲が減退していく料理など、アンジュにとっては初めてのことである。まさしく、豚の餌を出されている気分だった。

いつそノーマには相応しいのだろうか、しかし、自分は――

「おやおや痛姫サマ。あんなになんでもできちやう御方が好き嫌い？」

アンジュは食欲とともに落ち込んでいた気分がますます滅入っていくのを感じた。

視線を上げれば案の定、下品な笑みを浮かべる水、赤、橙。

顔合わせ以来、何かにつけてつつかかってくる3人組だが……アンジュはその名前を

覚えていない。覚える価値に値しなかった。

「よくないねエ、ちゃんと食べないと…」

言いながら向かいに座った橙：ロザリーは、アンジュの食事を自分のプレートへ移し変えていく。

「いざつてとき戦えないよお〜?」

たっぷり皮肉を込めながらひとしきり移し終えると、これ見よがしに食べ始め、

「そんなモノ、よく食べられますわね」

「…っんなー!」

さらりとそう返され、逆に固まってしまった。

「あらあら、清楚でハイソな痛姫サマのお口には合わない、と?」

ロザリーが固まり、クリスがアンジュを睨む中、自分の食事を口に運びながらヒルダは皮肉を重ねる。

それにも、アンジュはただただ無感動。

「このッ、お高くとまってんじや——」

「ど————ん————ん!!」

「…げっ」

「…あつ」

「……」

わなわな震えるロザリーが手元のお冷やを投げつけようとしたその時、低音の叫びが響くと同時に何かに気付いたらしいヒルダ、クリス、そしてアンジュがテーブルから素早く一歩退く。

「…ええ？」

唯一反応の遅れたロザリー。何なのかと声のほうへ向けば…

べちやつ

「」

今しがた口にしようとしていたプレートと同じ物が、まるごと顔面へと飛来してきたのである。それも、盛りたてアツアツ。

「…うあつちやつちやつちやつあツツ!?!」

「うわあ……」

「当然、ロザリーの顔面はただではすまない。

顔についた米やら何やらを払おうとし、その場で小躍りするハメとなってしまうた。ドン引きの他2人の横でアンジユは思った。無様、と。

「つてえ、なにしやがんだコラアッ!!」

二重の意味で顔を真っ赤にしたロザリーが怒号を上げるが、しかし、犯人は彼女のこ
となど目もくれていなかった。

「キサマアッ!なんなんじやこのメシはアッ!」

「ちよつと、やめなよおじいちゃん!」

案の定、じーさんの仕業であった。

額に青筋を立て、盛り付けをしている女性を指差しまくしたてる。

「ごはんはベチャベチャ!卵焼きはパサパサ!ポテサラはドロドロ!遠藤さんはマツ
チヨ!やる気あんのかコラアッ!!」

「(遠藤さんて誰だよ...)」がぼーん

「あーあ、また始まった...」

「あわわ...」

まごが制止するも収まるはずはなく、一緒であったミランダは呆れと共に肩をすく

め、ココは泡食っていた。

「ちっ…。嫌なら食わなくなっただよいいんだよ」

それに対し女性は悪びれる様子もなく、面倒臭いとばかりにあっさり突っぱねた。
ぬぐぐ、とじーさんが唸る。

「おのれええ。タダ飯食ってるだけに我慢してたが、しかしもう限界じゃ……。ならば！」
くわつと目を見開き、高らかに言い放った。

「キサマらの料理をうまくする方法を、《あの方》に教えてもらおう!!」どどーん!

「あ、おじいさんが教えるんじゃないんだ…」

「ココ、しーっ!」

☆ボンバー井上のニコニコお料理コーナー☆

♪ルルルルル

♪ラララララ

「……」コワモテカクガリー

「井上先生、今日はどんな料理を教えてくださいませんか?」

「バカヤロウ!!」ドンガラガツシャーン!

「料理つてのは、自分で編み出すもんじゃーいッッ!!」ばぼーん!!

⑤ボンバー井上のニコニコお料理コーナー⑥

「完」

「(教える気ねえじゃん!!)」ずびーん

単なる文字数の無駄遣いであった。

「ミ、ミランダ? おじいちゃんほっとくワケには…」

「いーのいーの、ヨウスケだつてツツコミばつかじゃ疲れるでしょ?」

「本当に大丈夫かな…」

一方、茶番の間をついてミランダはまごの手を引き、半ば強引にその場を後にしてい

た。

ちらちら後ろを気にするココであったが、ふと前方の階段を降りてくる眩い金髪に気付く。

アンジュだ。こちらはじーさんが騒いでいるのに便乗したクチである。

すると、おろおろしていたココの困り顔がとたんに喜色満面になっていく。

「アンジュさん！」

「……？」

呼ぶ声に嘲りや敵意を感じなかったからだろう、訝しげに振り向いたアンジュへ、ココは小走りで駆け寄っていった。

「あ、あの！えつと、えーつとお……」

「……」

が、しかし。近づいたは良いものの、しどろもどろになってしまいココはうまいこと話すことができない。

赤い顔でチラチラ目で伺ってくるその姿は小動物のようで、なかなか可愛らしいものだが、無表情を貫くアンジュの内心は疑問が膨らむばかりであった。

「いやー、やっぱり名前覚えられてなかったかあ」

そこへ、見かねたミランダがココの隣に並び、フォローに入る。

「あたしミランダ、こっちはココ。ヨウスケは…流石に知ってるかな」

「ど、どうも…」

「…わたくしに何か?」

「そんな身構えないでよ。実はこの子、あんたにもベタ惚れでさー、ずっとアンジュの話ばかりしてるんだよね」

アンジュは目を丸くした。まさかこのノーマだらけの島で、敵意害意ならともかく好意を向けてくる人物がいるとは思っても見なかったからだ。

「だ、だってアンジュさん、凄く綺麗なのに何でもできちゃうし、お姫様なんて、絵本の中だけだと思ってたし…」

はにかむココに、なにやらデジャヴを感じたまご。

ふと、何かが耳に引っ掛かった。

「…ん? あんたにもって…」

「…!?!」

「そうそう、最近のココはすっかり夢中だからねー、アンジュとヨモゴツ?!」

「~~~~ッ!!」

苦笑するミランダの口を、ココが慌てて塞ぐ。その顔はいよいよ真っ赤になってきて

いた。

「ミランダちゃんダメ！それ以上はダメ！」

「くくぷはっ。ごめんごめん、つい口がすべっちゃって」

「もう…」

「えーと…」

「ヨウスケくんは気にしないで!!というか気にしちやダメ!!絶対だよ!?!いい!?!」

「あ、はい」

わけがわからないまごだった、控えめなココらしからぬ剣幕に、選択肢はハイカイエスしか許されなかった。

一方で、アンジユもまた困惑を覚え始めていた。

目の前のココは、笑ったり怒ったり、表情がころころと変わる。

年相応に無邪気な仕草は、そう、まるで――

「…違う」

「え?」

「あ…いえ、なんでもありません…」

アンジユは顔には出ないようにしつつ、頭をよぎった思考を強引に握りつぶした。

「まっ、何にせよ同じ新人同士なんだし、仲良くしよ。わからないことがあればなんでも

聞いてよ」

「……」

アンジュは、にこやかにそう言うミランダと、ココ達を順番に目だけで見ていく。

人を見る目はあるつもりだ。少なくとも、この3人から邪な思惑は感じれなかった。

なので、

「では……」

少々不本意ながら、厚意に甘えることにしたのだった。

—————

「はい、まいどあり」

「ありがとうございます!」

場所は移ってジャスマインモール。

ここはジャスマインの切り盛りするアルゼナル唯一の商店であり、店主いわく「パン
テイから戦車砲まで揃う」らしい。

ここで、ノーマ達は各々が稼いだ金キャッシュを支払い、必需品や嗜好品を購入していくのである。

「はい、どうぞ」

ココはジャスマミンから受け取った商品を手に小走りで一同のもとへ戻つてくると、アンジュに差し出した。

物は紙とペンであり、アンジュが事前に渡されていたキャツシユで買ったものである。

アンジュがまず聞いたことは、『買い物の仕方』であった。

「まさか、買い物物のやり方を教えてほしい、とはねえ」

「アンジュさんは、外の世界ではどうやってお買い物してたんですか？」

ココの問いに、アンジュは渡された品を眺めていた顔を上げ、彼女を一瞥してからどこか遠くを見つめた。

「…望めば何だつて手に入りました。望んだ物が手に入る、望んだ自分がある。

かつての暴力や差別が無い。困った事は何一つ無くマナの光に満ちていました」

すると、今度はまごが目を丸くさせた。

「え、じゃあお金の仕組み自体なくて、食べ物も、オモチャも、服も、全部マナで解決してたつてことですか？」

「ええ、その通りです」

「へええ…」

マナの世界を想像するまごの隣で、ココが感激だと言わんばかりに胸で両手を組み合
わせる。

「本当にあつたんだ、魔法の国!」

「魔法の国、か…」

夜、与えられた簡素な部屋で、じーさんはまごから一連のやり取りについて聞いてい
た。

「そーなんだよ。スゴいよね、マナって。お金が無くても何でも手に入るなんて夢みた
いじゃん」

「……」

まごはベッドに腰掛け、無邪気に足を振っていた。

確かに、何の対価もなくありとあらゆるものが手に入り、職も遊びも思いのまま。無
益な争いなどは何一つない。

そんな世界は、まさに究極の理想郷と言えよう。

しかし。

「まごよ」

「なに？ おじいちゃん」

「その世界は、歪んでおる！」

「えっ？」

じーさんは断言した。

「歪んでるって、ちよつと大袈裟なんじゃ…」

「お金がなくとも物が手に入る世界、苦勞せずとも好きな職業になれる世界、病氣も何もマナさえあればへつちやらかな世界……。たしかに、それはとても魅力的に聞こえるかもしれんな。じゃがな、

それは、『人間』を『ヒト』でなくしてしまう世界じゃ！」

じーさんの見解は、衝撃的なものであった。

理想郷が、人間をヒトでなくしてしまう…極論とも暴論ともとれるその言葉に、まごよは啞然としてしまっていた。

「おじいちゃん、それってどういう…」

「まごよに完全にわかつてもらうにはまだ早いかもしれん …。けど、これだけは覚えておいておくれ」

「光と闇は表裏一体…。闇を拒絶する世界に、光などありはしないのじゃ…!」
「……」

それが何を意味するのか、まごにはよく分からなかった。あえて言えば、どこぞのマンガのセリフをパクってきたんじゃないかと思った。

しかし、自身を見つめるじーさんの目はひたすら真摯な色をおびており、無視してはいけないんだと、笑い飛ばしていいことでは決してないのだろうと、強くそう感じた。

「おじいちゃん…」

じーさんが回りくどいことを言うとき、それは何か重要な意味が込められている時がある。過去、巻き込まれてきたいくつかの事件でもそうだった。

もつと詳しく聞くべきだと思い、まごが口を開いた——その時。

ビーツ　ビーツ　ビーツ

「!!」

夜であることなぞお構い無しとばかりに無遠慮な警報アラートがけたたましく鳴り響く。

緊急事態——すなわち、ドラゴン出現の報である。

「ムツ、敵襲か！よし、ちよつくらいつてくるぜ！」

「あつ!?ちよつとおじいちゃん！」

「なーに、心配するな。ワシは必ず生きて帰ってくる！むろん、第一中隊アイツも一緒にな」

そう言つてサムズアップすると、じーさんは部屋を飛び出していった。また誰かのパラメイルに便乗する気なのだろう。

「……なんだろう」

しかし裏腹に、じーさんが走り去つていった廊下にぼつんと佇むまごの胸中には、言い知れぬなにかがじわじわと広がりがつつあった。

寒気にも似た、気持ちの悪い奇妙な感覚。

「何か、嫌な予感がする……」

人が死んだ。

「……なんなの、あれ」

自分の目の前で、いともたやすく、いつそ滑稽なほどあっけなく。

『ドラゴン、コンタクト!』

あれが、ドラゴン。

あれが、敵。

あれを倒せと、そう言うのか。

なんの冗談だ。

「なんなのよ……なんだって言うのよ……!?!」

馬鹿げてる。

こんなの現実なわけがない。

しかし……

シヤギヤアアアッ!!

「ひっ……!?!」

逃避するアンジユを嘲笑うかのように、ガレオン級が雄叫びをあげるのだった。

同時に、第一中隊の面々ははるか眼下の海面を見つめ、思う。

「(ああ、やっぱり死んだか……」

校長……」

『ながとしーーッッッ
!?!?』

ありがとう校長！さらば校長！キミの勇氣は、きつと伝説となるだろう！祖師ヶ谷大蔵あたりで！

「作者め、ネタが出ないからってテキトーに地元の名前使いおったな」

「いらんことを言うなクソジジイ!!」

「最近、ミランダちゃんの口がどんどん悪くなってる気が…」

「フフ、そうやって子供は大人になってくもんなのさ」

「なんの話ですか隊長」

つづく！